

翻
刻

みち
艸集
卷之上

茨城県立図書館

郷土資料整理ボランティアグループ

翻刻について

本書は、茨城県立図書館蔵書に基づいて、同郷土資料整理ボランティアグループが、原文の読み下し、ワープロ入力、および編集を行い翻刻したものである。グループ作業に関する事務とりまとめについては図書館情報資料課のお世話を受けた。製本にあたっては同じく同県立図書館の図書修理ボランティアグループに指導をいただいた。あわせてお礼を申し上げます。

平成二十八年四月

茨城県立図書館 郷土資料整理ボランティアグループ

金沢多恵子 唐沢矩子 金原ヒロ 木村寿子 辻雅子

中山真一 堀江克己 山崎弘道 柚原俊一 綿引文子

「みち艸集」について

著者雨宮端亭は、水戸藩医原玄春昌術を父とします。昌術の父昌忠も医師でした。父昌術の長男、つまり端亭の兄、南陽昌克は水戸藩医として名を遺した人です。端亭は、没年から計算すると、一七五八（宝暦八）年の生まれ、次男であったためか、雨宮隼人安尊の養子となりました。養子になった年と雨宮家の詳細は、分かっています。一七八八（天明八）三十歳で進士となつてから、養子隼人の跡を継いで仕官したのか。

それから三年の後、一七九一（寛政三）年、三十三歳で松岡郡の郡奉行となり、引き続き一七九四（寛政六）年から一七九七（寛政九）年まで何郡奉行。二年の間をあけて、一七九九（寛政十一）年から一八〇二（享和二）年まで太田郡奉行を勤めています。各郡奉行を三年ずつ勤めたこととなります。郡奉行の後の経過は、分かっています。一八三二（天保三）年、致仕し同年歿という経歴です。

雨宮の姓についてですが、『水戸文籍考』には雨谷とされていること、『みち艸集』の見返しには、本文と別人の筆跡で「雨森」と書いてから「森」を「宮」に変えていること、雨宮家についても調べる必要があります。今は、手がかりを持ちません。

ここに取り上げた『みち艸集』原文の野線は「叢桂亭」の文字が入っています。叢桂亭は兄南陽の号です。兄の用紙を借用したものでしょう。端亭の真筆を補強するものです。『みち艸集』は、端的に言えば、前記の水戸藩内の多くを郡奉行として勤務した見聞をまとめたものといえます。

前記見返しには、「常陸三郡地志」とあり、本文巻之上に西沢散人の名で書かれた前文に内容が説明されています。「西沢散人」は、端亭の雅号でしょう。郡奉行を終えた後のことは分かりませんが、亡くなるまでの三十余年の間の覚え書きをまとめたものと考えられます

上下巻でかなりの長さとなりますが、筆跡が変わっていません。余暇を見つけて、一気に書いた物でしょうか。

平成二十八年四月

堀江克己

写録注

読者の便を考慮し、本書では以下のように標記しました。

- 旧漢字は原則として常用漢字とした。ただし、固有名詞(地名、人名)はこの限りではない。
- 異体字、変体仮名は正字に直した。
- 読み仮名は原本と同様片仮名とした。原本にならない本文同様の文語体である。
- 漢文調は読み下し、また送り仮名(ひらがな)を付けた。
- 仮名づかいは、原文の歴史的仮名づかいのままとした。
- 明らかな誤字は「ママ」とルビを振り、正しい字を()内に示した。また明らかな脱字は()を挿入して補った。
- 原文は句読点がなく書き継いでいる。読みやすくするため句読点をつけるべきところを一字あけとした。

帝陸三即地志 李商隱

君身乃可南 端亭子著

宋

常陸三郡地志

原南陽藏

郡奉行雨宮端亭著

又ち州

卷之上

文化三年の... 藤中... 及...

... 命

三の郡... 一説...

... 書...

... 道...

... 山...

... 山...

... 山...

... 山...

養正

1.2.9 5. 購 求

美ち艸

卷の上

文化三年ひのへとらの水無月篋中のふミとも曬せるに反故のう

ちに小きとちふミあり 是ハさきのとし郡奉行を 命せられ

三の郡をめぐり隣境をも一覽せし時 むらおさ里人のかたれるを

其まゝに書つけたるにそありける ひらき見るに矢立の筆

もて道行なから書たるもあれは よみわくへくもあらすことに

画の事ハたえて知らされは見るさまもあらせれとも 山のすかた

或は登山の眺望に方位をしらんためのミに凶したるなり

つくつくうち見るに今ハむかし其地のことなんとおもひ出していと

興あり それか中に里人のかたれるふることあやしき事も少な

うへはもとまはし紙魚の者いふん口ねく北窓の障
僕らあつての字はあつてはあつてはあつてはあつては
集り名つてはあつてはあつてはあつてはあつては

田澤教人

からねともたゝに紙魚の有となさんも口おしく 北窓の睡りに
倦るおりおりの筆すさひに再ひ端亭にうつしてミちくさ
集と名つくることしかり

西澤散人

松平 寛政三庚年より日六寅年をく日の筆記

一 額田村古墳跡あり即九心子三百六十坪二、九心子三百坪三、九心子坪四、教田之墓前出通の代は廢せり色々々松平郡

園又志るを

額田の神流跡は太杉あり日通を二丈六尺あり

一 箱田村事は山標作あり

一 中根村は岩穴大小二つあり一は十帝五帝のいふやと土

人云はあり

一 平城村は護麻壇石あり元禄九子十月 義公の年

是は清浄を唱ふなり 松平の又少いの方に高田浦といふ

養正

松岡 寛政三亥年より同六寅年までの内の筆記

一 額田村 古城跡あり本丸四千三百六十坪 二ノ丸五千三百坪 三ノ丸七千坪あり 額田久兵衛照通の代に廃せり くわしく松岡郡
図にしるす

諏訪明神潰跡に大杉あり 目通にて二丈六尺五寸あり

一 稲田村 年々御煤竹納る

一 中根村に岩穴大小二十二あり 其内二十郎五郎のいわやと土

人云伝るあり

一 平磯村ニ護麻壇石といふあり 元禄九子十一月 義公の命

にて清浄石と唱可申旨 仰出さる 又少し北の方に畜生浦といへる

不何是ハ磯名塔中家ノ下ノ石ハ塔南ニモ子坂ノ土人の
名付ト云

一村李太神ヲ四月九日競馬河ノ長砂流和言方建ニテ村ノ

由ニ 二意ニ為テ元禄二三月十日ニ其ノ部ノ山若井村

伊勢船ヲ念廻船難凡モ道繁ニ切立テト一曰九月十三日

縁ヨリ十八人の獲ル毛初穂丸ニ流ル事奈組十八人の者礼奈ハ

一ノ波ヲ 義公の命ナシ彫刻モ 吳室ヨリ香徳を古

海也ト云 上リたる云

一ツトミ浦伊勢の河漕ヨリト云 一毎年二月十五日新一綱ヲ

元禄十三年正月十日伊勢ト云 同日筒敷ト云 元年

所あり 是ハ磯石皆北に向ふ其外の石ハ皆南ニむかふ故に土人の
名付しと云

一 村松太神宮 四月九日競馬あり 長砂 須和間 高野三ヶ村より

出す 虚空蔵靈験 元禄二巳八月十三日奥州南部小太井村

伊勢屋与兵衛廻船難風に逢髪を切立願いたし 同九月十三日

縁日に十八人の髪の毛初穂共ニ渚へ打寄 乗組十八人の者礼参い

たし候次第 義公の命にて彫刻す 靈宝に香炉一有古

海中より上りたると云

阿こぎ浦 伊勢の阿漕になそらへ毎年正月十五日朝一網ツ、

ひき候様にと元禄十丑正月より仰付らる 同日筒粥とて其年

諸般の書に記さるる所なり

一 養宮村の川 類志に名産

一 幡村市平、とる百餘の家、木の枝、上枝五枝、中枝三枝、下枝二枝、

とく中枝、百石、白木の枝、七石、是も白木、すく、八尺

木の枝なり

一 大森村、水、村、水、石、白、石、なり

一 志多村、水、水、なり

ハ、水、記、不、能、推、若、院、知、山、年、以、奉、う、志、多、山、麓、く、世、也、下

の、ある、サ、イ、の、り、し、有、る、本、ま、の、中、の、水、流、り、つ、又、水、き、ん、の、流、り、

り、大、移、り、五、人、抱、り、二、丈、板、も、五、丈、三、丈、と、し、喜、久、島、に、入、り、

養宮村

諸穀の豊凶を見る事あり

一 茂宮村の川鮒 しゞミ名産

一 幡村 市平といへる百姓の家に梅あり 上枝紅梅にて二間計はび

こり中枝四間ほと白梅 下の枝七間計是も白梅なり 高サハ八尺

はかりなり

一 大森村 瀬谷村 寒水石しま寒水石あり

一 真弓村にも寒水石あり

八所権現別当徳善院本山年行事なり 真弓山麓より二十五丁

のほる 二十丁のほりて右の木立の中ニ御手洗あり 又少し登りて籠り堂

あり 大杉あり五人抱あり 二丈 八尺 縦にも五両もミとて一丈五六尺廻る

寺に其の遷り、近家の年号あり、権現の社あり、
 又も其のりりしとさめり、
 將軍の時の事あり、
 現法庵の所あり、元統七年三月、
 西の山より修波、
 山の西の山あり、
 ちりりりり

一 長谷村 密蔵院 山の奥、
 二 五雲の海、
 三 西祖、
 四 山

鳥居仁王門鐘あり 延宝の年号なり 権現の社の前に行堂あり

夫より五六町下りて道のかたはらに手懸石腰掛峯と云有 義家

將軍旅行の時手をかけ腰をかけ玉ひしと云伝ふ 又三四丁

下りて山王平タヒラと云所あり 山海眺望の地也 石蔵と云所もと権

現鎮座の所といふ 元禄七年真弓山に有来リヤウヲウの面

西山公より御修復被遊徳善院へ被下寛政元酉年六月晦焼失す

山の西の下に寒水石の間に弁天有 此辺にて青木の事を山か

ぢめと云

一 長谷村ハセ 密蔵院本山関八州大先達なり 十一面観世音山門の

二王雲溪の作と云伝ふ 山門の内に弁天堂あり鐘楼あり

一田原村の懸る色了村穀サ田四子五子五方四指石余心

一瑞新村曰二波江新山寺行一甲の寺の戸瑪板板四方唐志

元事久徳法考院 乐照者の雲心の戸のり一山の教新山

寺乃三字少日其の法良為法我主のい寺に宝和唐画山水文

進子、行一田山水宋徽宗皇帝の画と云ゆ、又作竹茂新

寄附の常水画の懸の如新行一世うく或付鳴たぐを和く楯

品ひく月、瓜とくると云ゆ、王平種と宝和行くと云す草鞋

とつけと云す一田の如く

一足野言村堰り、村穀ハ行村水也、田四子五子

菩薩都明神ニ神宝杉の古木のり、木多、文字虫の喰ひ

長生亭

- 一 田渡村の堰水懸り村数二十四 田高五千五百四十石余也
- 一 瑞龍村内ニ沢山耕山寺あり 開山堂の戸瑠璃板四方唐桑
元来久能德音院 東照宮御靈屋の戸のよし 山門の額耕山
寺の三字竹内御門跡良尚法親王の御筆也 宝物唐画山水文
進筆とあり 同山水宋徽宗皇帝の画と云伝ふ 又佐竹義敦
寄附の常永画の鶉の懸物あり 此うつら或時鳴たり其おり猫
飛かかり目へ爪をたて候と云伝ふ 其外種々宝物ありと云 予草鞋
をつけて至りしゆへ不見
- 一 里野宮村 堰あり村数八ヶ村水懸り田四千石余
- 薩都明神ニ神宝杉の大木のわり木有り 文字虫の喰たる

みく 鹿嶋市ソウの末とつり 此片割ハ鹿嶋明神の社
内ニ在リ云

一 白羽村 伽羅石温石つり 大杉二本ハ幡左所ノ獲掛松と云
今ハ在リ

相倉山 大聖院十八町等ニ石像ハ新神也 白羽石つり 親
考をり 西山ニ湯等と云 雲扇形ハ板也 山城ニ在リ

と云 山流ハ同じしと云 清水 方丈ノ下ニ大寺ニ湯井つり
禪師ノ米麩ノ年等ノ是ハ又自ラ小寺被野ノ時ノ法寺ノ禪

のり 義等ノつりハ此ノ遊ニ青貝ニ視在リ 八景ノ和歌
撰系ニ法氣ノ末等 三幅射探書等 休ノ画車被画撰
此ノ末等

如く 鹿嶋御ソウの木とあり 此片割ハ鹿嶋明神の社

内ニ有と云

一 白羽村 伽羅石温石あり 大松二本八幡太郎腰掛松と云伝

今ハなし

松倉山大聖院 十八町登りて石像の竜神あり 白羽石あり 観

音堂あり 西山公御筆とて団扇形の板に 山城二国こそか

はれ東山流ハ同じこゝも清水 方丈の左に大なる濡仏あり

鐘あり 承応の年号かすかに見ゆる 小寺破却の時の潰寺の鐘

のよし 義公御つかひ被遊候青貝御硯箱あり 八景の和歌

撰家清花衆筆 三幅対探雪筆 竹の画東坡画讚

日光清
瀧寺より納

讀上林春曉夢在歸史



達六の画 畏懼等

龍骨 九穴の龍 平福福口格口十 西山云々口史おと先位

了園云々身由も者し色口龍云云云

兩夜伽ニ 西山大君松若山を清考弟坐 桐花あつめひ曇る山

寺の入おの種よ春風をぬく

一茅根村 乃信石 陽新山之用

一赤尾村 ミリ石 壺多急田五子云々石守 廿七ヶ村

一在福寺村 白工系付にまゆり

一町原村 西はゆり村 雁石出さるるをく 金止塘於云々云々

一西の中村 善控樹云々

讀上林春曉

讚上林春曉麦莊帰叟



達磨の画 毘修筆

蛇骨 九穴の鮑 朱瑠璃御猪口 十 西山公より御遺物に先住

了円ニ被下置候由にて右の通御納の品の由

雨夜伽ニ 西山大君松倉山にて御当座 桜花ちりかひ曇る山

寺の入相の鐘に春風そふく

一 茅根村 間沢石 瑞龍山御用

一 赤須村 ミかけ石 御留 堰水懸田五千六百石余二十七ヶ村

一 常福寺村 白土分付山より出る

一 町屋村 西河内下村班石出る御留なり 金山堀跡所々にあり

一 西河内中村 カウト 菩提樹あり

一 東河の上村に藤原の邸ありて其の幅一丈余あり 絶景なり
 予画と志す 此邸をくゞりて 大伴をふりて 東に往く 而夜也
 西山大君藤原の邸は日南座に 山脈のゆるぎ 子孫の系なり
 つゞきとめぬ ぬたき ぬたき
 法三の四月山嶺あり 嶺の後の山の絶頂に 則利刀を祀
 所之奥に月山と稱す 云 羽黒の巻も此山にあり 古入四馬嶺
 現を移し 法三と云ふ 移す
 一 坂上村 薬師の 湧泉あり 此泉より入る 病可治なり
 一 入四河村の岩山 橋既寛永七年可断なり 大日堂を合併せ
 是者の垢窟均壺形にふれあり 種樹あり 大日堂のたゞ方と奥の

- 一 東河内上村 玉簾寺ニ滝あり 高五丈三尺幅一丈余あり絶景なり
予画をしらす写す事あたわす大体を凶して末ニ附す 雨夜伽ニ
西山大君玉簾の瀧を御当座ニ 山姫のくるや千筋の糸なく
つらぬきとめぬ玉たれの瀧
御立山の内月山権現あり 滝の後の山の絶頂ニあり 則利刀を鍛
所也 奥州月山を移すと云 羽黒山是も御立山ニあり 古入四間権
現を移し鎮座すと云 今ハ社もなし
- 一 坂野上村 葉湯あり 湧泉を居風呂にして入る 疝氣吹出ニよし
- 一 入四間村 御岩山権現寛永七年開闢なり 大日堂常念仏堂
- 道者の垢離場竜形の不動あり 鐘楼あり 大日堂の左の方より奥の

院いん 入田いりだ 古東河内ふるとうわの 五村いつむら 才さい 知ち 山口やまぐち 又また 昇氏のぼりうぢ

妙たう の用のよう 中村氏なかつむらじ 道孝みちたか 才さい ウウ ドド ナナ ウウ 小推名氏こすいなじ 道孝みちたか 十じゆ 初はつ 子こ 官くわん 隆たか 小こ 氏うぢ

是ハ信濃ノ公也 信濃しんぬ 公こう 也なり 才さい 家け の 才さい 一いつ 村むら と 名な け 一いつ 村むら 小こ 氏うぢ

老人らうじん の 話わたり 三さん 國くに の 十じゆ 元げん 今いま 傳でん 一いつ 才さい 一いつ 村むら 小こ 氏うぢ

才さい 又また 思し 才さい

江戸えど 号ごう 才さい 通と 長ちやう 判はん

三月二日

日信にちしん 才さい 通と 隆たか 判はん

白川しらかわ 才さい

美治みぢ 判はん 才さい

同どう 才さい

卯月うづみづき 才さい

政宗まさむね

実宗まこと

才さい

叢そう 佳けい 年ねん 歳さい

院へ至る 入四間ハ古東河内上村より分る 此所ニ山口に関氏 今年寄
右馬之允祖

竹の内ニ中村氏 年寄鴨
之允祖 オウドチウに椎名氏 年寄十
之允祖 梨子窪に鈴木氏

右四家の豪富あるゆへに四間と名つけ一村になるよし

老人の話也 三年寄の内十之允今絶たり 右馬之允所持の古文書あり

前文略す

江戸兵部太輔 通長 判

三月二日 同信濃守 通隆 判

白川御館 関治郎殿 貴報

同前

卯月二十二日

政宗



関口君

→ 此字よめ兼候

一 大味村 世弱山土子七子九百四十石 余土子七子 牧口五三六石
 年年六月より世弱山に水出せし日八年中の好む世弱山に水出せし日
 永言る三月を

土蔵山 大味山曾根中戸川 三子村甘藷を四丁三石を

一 中戸川新田を推算と仰る推算を中戸川に推算す昔年三子村の推算より

世弱山四丁甘藷は江戸道道中かゝり世弱山に推算を中戸川に推算す

三子村は十丁甘藷は江戸道平均十五石に推算す或は引位の

一 黒板村 世弱山 割石長又長又長又 烏帽子石二石三石

世弱山 割石長又長又長又 割石長又長又長又 割石長又長又長又

每石 東葉東葉 硯石硯石 硯石硯石 硯石硯石



一 大能村 野駒山土手七千九百四十間余 土手受取
三十五ヶ村 牧御取立ハ延宝六

年午六月なり 野駒為御取被遊候ハ同八年中より始る 野駒敷切ニ成候ハ安

永六酉三月なり

土嶽山 大能鳥曾根 中戸川三ヶ村付麓にて廻り三里ほと

一 中戸川新田にて椎茸を作る 椎茸一本 一籠なり一斗二三升より
二斗近くまで入る

一 駄ニ四本付にて江戸迄道中かゝり二貫文位 椎茸一斗ニ付直段十

三匁位より十六匁五分位迄平均十五匁位也 小椎茸ハ弐匁引位のよし

一 黒坂村 堅破山 割石 長二丈一尺五寸
横一丈八尺六寸余 烏帽子石 二間ニ高サ
九尺ほと

畳石 物をたゞミたる如し
大サ二間ほと 冑石 今しやか石と云
高サ二間ほと 坊主石 西麓十七丁ほとニありと云
二丈計と云予不見

舟石 東麓ニ有り四間ほと
是も予不見 硯石 東麓ニ有り二間四方
ほとと云是も不見



ワリ石ノ図

岩井少少の所ありと云

一 細田村より東金砂の山ありて其村少ありて那壁をさるるあり

と云

一 大菱村より東湯室屋五里あり其山を高野と云

一 小菱村より孫平と云其山あり 湯室の孫彼はなりと云

おろり

一 小舟村より湯室山あり 湯室とき屋三つありて其山の尾はみく

るるれく名つけらるる也 湯室の山舟村より二つの山ありて金砂の

山は又志の山といはれ石餅の山は志の山といはれ

一 小舟村湯室より小舟村より言母出ると云 孫十三居りて其

養正年歳

岩茸出る所有りと云

一 細目村より東金砂へ登りしか其時小雨ふりて眺望する事あ
たわす

一 大菅村に薬湯 宝曆五年より始り今甚おとろへたり

一 小菅村に孫平といへる百姓あり 御先代御旅館になりしと 今

おとろへたり

一 小中村に鍋足山と云ありするとき峯三ツ有りて鼎の足の如く

なる故かく名つけたると見ゆ 峯一ツは小中村分 二ツの峯ハ高倉村也

山頂にしのみ草 いわ松 石斛有り 眺望の図末に記す

一 小妻村 鍬ほと有 此村より雲母出て元禄十三辰年掘たる事有

名也〜〜して止むと云

一 徳田村の傍境に岡境の神宮社に竹の笹日の丸扇と有り
次の村に大徳と云ふ所白川郡なり

一 笠石新田より根石谷、出る所の傍に大石を笠石の如しけり名付と
又白

一 里川新田に三鈴の宮と云ふ山あり常なる泉あり境あり眺望
の所也よ記す山の坂も宮也やう上りたりおむとくハサレ也

一 周是新田に多足石に山四郡有りの時つ我後なる付

一 柳江新田に所寺有る昔年貢あり山鏡を境あり又木三葉ありと
標
標あり地之邊に所寺に鏡地ありと云ふは焼失後之後と云ふは誤

色悪しくて止むと云

一 徳田村 御領境也国境に境の明神あり 社に佐竹の紋日の丸扇を付たり
次の村ハ大供と云 奥州白川郡なり

一 笠石新田より根小屋へ出る道の傍に大石有笠の如し 故に名付と

見ゆ

一 里川新田に三鉢サンコムロの室といへる高山あり 常州奥州の境なり 眺望

の図末に記す 此山の坂に雲母出る上品なり おしむらくハ少し也

一 岡見新田ハ岡見弥次衛門御郡奉行の時開発故名付

一 柳沢新田 此所無高無年貢なり 御領分境尚又木立繁りて猪

鹿出る故先年ハ御弓御鉄砲御渡ニなりしか御弓ハ焼失後御渡しなく御鉄

家数廿一人
男二十一人
女十人
馬十
二匹

地ハ橋野前ヨリトテ云々境目ハ炭塚ニシテ花園ノ一帯ト云

此新田ナリ他領花園山権現ノ所ニ墾テテテテ社ノホニテテテテ

ヤ橋ニテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

一 若栗村 田喜保 十石 年橋野 在 年 地 有 田 十 石

一 上中野村 菅 麦 十石 地 有 田 十 石 地 有 田 十 石

一 横川村 大 全 田 坪 十 石 地 有 田 十 石 地 有 田 十 石

養正年歲

家數七軒人

別二十人

男二十人

女十人馬十

二疋

砲ハ獵師筒ニなりたると云 御境目に炭塚あり 花園より築しと云

此新田より他領花園山権現へ詣る能やしるなり 社の前ニ大なるかう

や槇二本あり 此山奥に井壺瀧絶景の地と云予ハ不見 此所にかうや

まきの実生多くありといふ 人跡たへたる所といふ 花園村一円神領

なり 予か帰る時ハ村の名主組頭なりとて大勢出てかゝミ居れり いつとても

かくの通りと云へり 此花園山ハ治承年中佐竹冠者秀義 源頼朝の

兵を引樹受け 金砂山の城郭破れて後此山にたて籠りたりと云

一 若栗新田 享保十四酉年獵師庄三郎熊打留たる事あり

一 上下君田村 蕎麦の名物なり かの畑へ仕付候殊ニよし

一 横川村 大金田坪といへる所に石あり石炭にやくなり 本郷より十二丁計

南に遊りし三原の麓の大塚村の境とて三原とて船生縁桑の地とて
 東に遊りし横川村の二十丁上とて大塚とて三十丁の以茶を均す
 一大塚村の畑の中より石鑛出ると他飲下相田よりもちと又上田より
 りつる

一 西河の上村谷津とて土人三百九十九名と云

一 中差村とて節節と云ふ山嶽とて

一 仙危村とて茅忠とて師を祥巽とてとて喜り子の子のたると百七丁

一 廣の増井西宗とて場田とて幼恒庵とて和と上りたると云穀る也

一 和のりり女殿とて

一 城系村天兆神とて二丁とて一丁とて吾國永春可也者人余喜る

南に滝あり三段に落る 大塚村への境とり上坂といふ眺望絶景の地なり

末二凶あり 横川村より二十六丁上る大塚へ下り三十丁あり 御茶屋場なり

一 大塚村の畑の中より石鏃ヤンチン出る 他領下相田よりも出る又上相田よりも

いつる

一 西河内上村谷津多し 土人三百九十九谷津と云

一 小菅村ニ不動瀧と云小滝有

一 白庭村ニ夢想国師座禅岩穴とて一ツ 弟子の穴とて百七ツあり

庵ハ増井正宗寺境内にある幼(幻)住庵を願の上引たると云 穀留番

所あり舟渡し有

一 磯原村 天妃神あり 一ツ嶋あり 異国船番所あり番人二人金一両

一人半御扶持 先年ハ
二人扶持 此村より名古屋の関へ二里有 隣村神岡村ハ他領

なり 神岡より新町 一 二下野村
と云 あわの 一 二中野
村と云 名古屋の関ニ至る此所通し

常奥の境也 此先ハ奥州菊多郡関田村なり 海を菊田浦と云絶景也

末二函あり 此きり通しハ常州関本下野村篠原和泉と云者承応年中

奥州の商人申合きりぬきたるよし はゞ一丈計長サ二十六間余あり

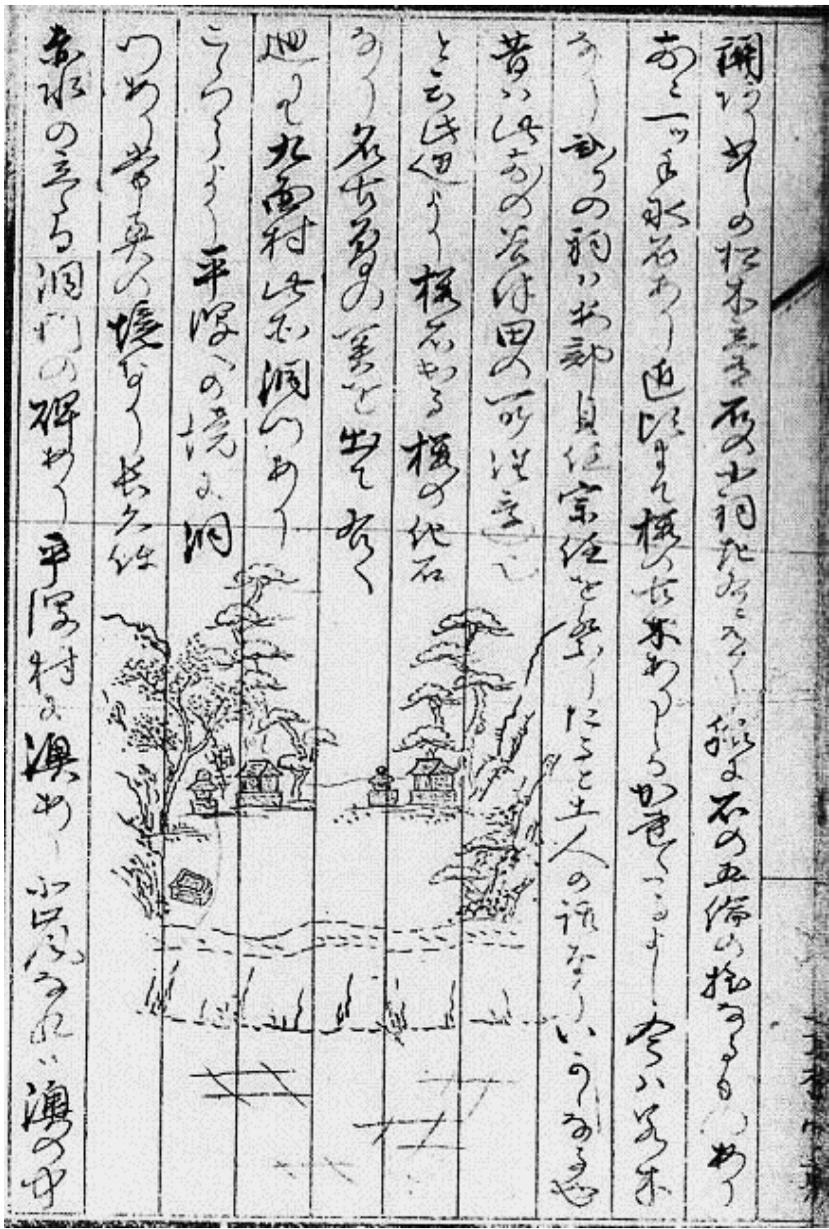
篠原和泉きり通し頭取ニてこしらい候故たゞりあるとて次第に衰微

して嗣絶けり地脈をきりけるゆへと云伝ふ きり通しの左り山の中段に

小キ祠を建てたゞりを除んとて篠原氏毎年元日まつれりと云 今和泉ハ

跡たえたれとも其類族か今にのこれるよし 切通しの所を和泉坂と云

切通し北の方ハ七曲はかりの坂なり 是より五六丁西の方に古のなこそ



開つて舟のねもまき石の洞たるる。船よ石の五倍の物するものあり

あつてつま水石あり。也。以ては、橋の古木ありし。わきくこす。今ハ、木

を、わきの洞の舟の部貞任宗佐を築。はこ土人の祈を、いふ。あま

昔ハ、はきの谷舟甲の可は、まこ

とらは、まこ。橋あり。橋の化石

あり。名古多の、まこ。物と、まこ

地ハ、丸面村は、石洞のあり

うつ。うつ。平野の、境ハ、洞

つ。あり。昔、まこ。境あり。長久保

赤坂の、まこ。洞の、碑あり。平野村ハ、海あり。小只、まこ。海の中

関あり 少しの松木立有石の小祠左右二有り 脇に石の五倫の様なるものあり
前二一ツ手水石あり 近頃まで桜の古木ありしかかれたるよし 今ハ若木
なり 二ツの祠ハ安部貞任宗任を祭りたると土人の話なり いかゝなるや

昔ハ此前の谷津田の所往還也

と云 此辺より桜石出る桜の化石

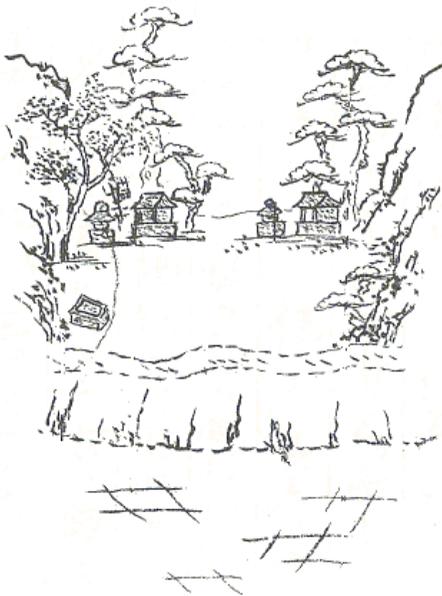
なり 名古曾の関を出て右へ

廻りて九面村此所洞門あり

こゝつらより平潟への境に洞

門あり 常奥の境なり 長久保

赤水の立たる洞門の碑あり 平潟村に澳あり北嵐なれハ澳の中



舟を渡るもあつた風流の流るる入津より傍に花宿候と云

幸さ八幡の海を眼やよ又々言やすくむくくくく中津村の舟も

洞のわく言井村の舟も言り過しし言井村の舟も言り言は村の舟

言り長久保の舟も言り言り多々郡の舟も言り言り言り言り言り

言り言り言り言り言り言り言り言り言り言り言り言り言り

三浦 今六津 四浦 今七ツ 五浦 今八ツ 六浦 今九ツ 七浦 今十ツ 八浦 今十一ツ 九浦 今十二ツ

九浦 今九面 興 今九面 按 今九面 附 今九面 會 今九面 丸 今九面 一 今九面

吹風を言りその言とくも言り言り言り言り言り言り言り言り

一柳は新田く言古言く言今言く言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

豊後守

にて船破る事あり 南風異の嵐なれハ入津よし傍ニ花蔵院といへる

寺有 八幡あり 澳を眼下に見て景地なり ひらかたより中野村へ行にも

洞門あり高井村へ行にもきり通しあり 高井村ハ平潟より大津村へ通る

所なり 長久保赤水の説に此所多賀郡の始りなれハ此高井などハ高県

の本郷なるへしと思はると云 赤水云 一ツ嶋 イソハラ天妃 二ツ嶋 イソハラ

三湊 ミドウ 是より大津 四ツ浦 今ツルシト云 五浦 イツラ 六ツ浦 今ヘビカ シラト云 七ツ浦 今長ハ マト云 八ツ浦 今ハ平方村

九浦 今九面 奥州 按ニ此説附会ナルヘシ

吹風をなこそその関と思へとも道もせにちる山桜かな 源義家朝臣

一 柳沢新田 人家七軒人別三十人家に根太なく地の上へ大木を横

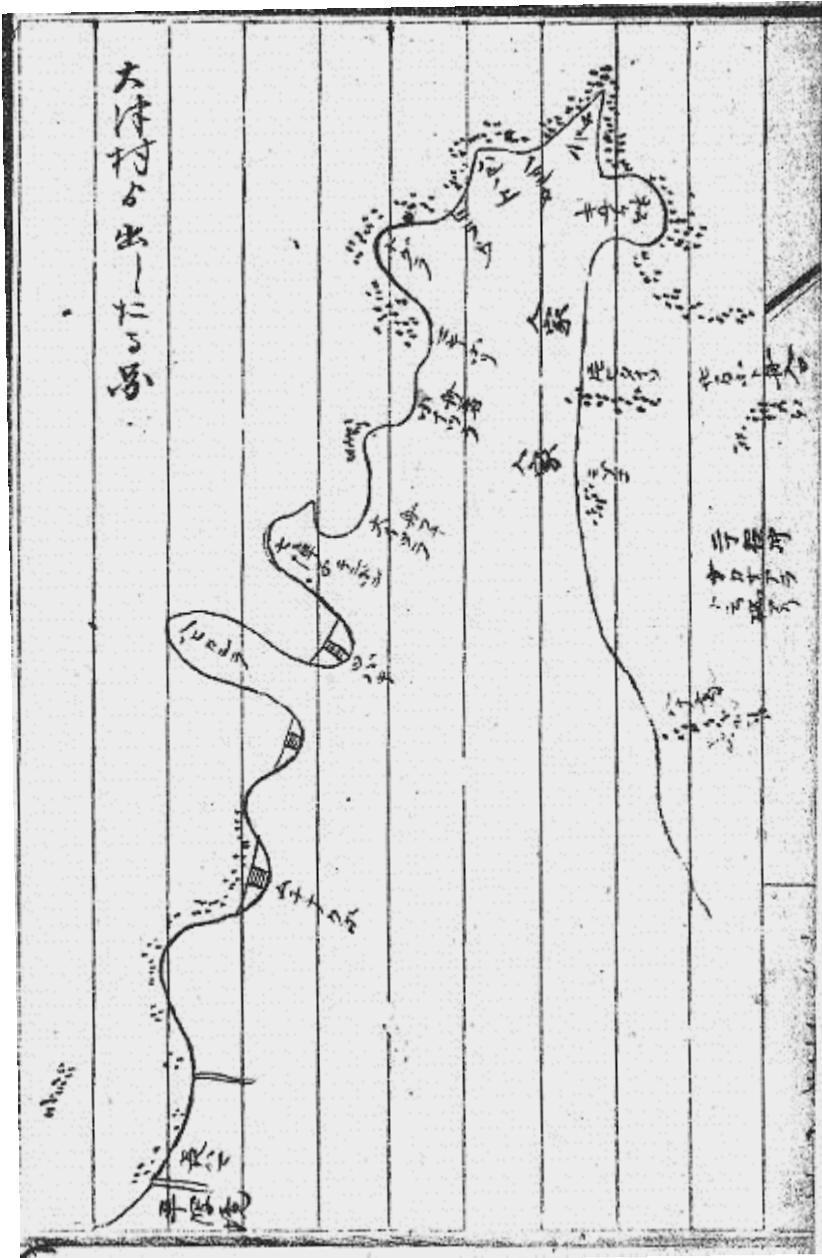
にし其上ニ竹とならへて莖を敷く まどハ茅を壁の所へおふち竹を

あて結て其間をとところ縄を以て結びて明りを取る 無年貢なれ
とも耕作の品にて食にたらす世の早魃のといへる年ハ取実よし 三年ニ
一年くらい実のる 常に木地挽を業とす 是も至て雑なる物はかり
なり 予か至りし時木鉢の挽物の至て小なるにしいたけ三ツ乗せて出す
余村にてハ少しのものなりとも受さる事なれとも余りに其志のやさ
しく支配のものも無年貢の地にて貢物もなき故か初て廻村のせつハ
いつもかくなりと云故もらい返れり 山奥にて他村より娶嫁するも
のなし 新田の内に相応のなければいつ迄も嫁妻せすと云 古ハ軽き
罪人を此新田へ被遣たる事ありと云 此時の組頭も三十余になりて
妻なし 庄屋ハ横川より兼帯す

一 大津村 義云 松本昆布と海中一町を越すと松本なるなり
云今たぬくふ大原の海を渡見布打ふるなり有と云遠沖も残
きる也五浦より具名なるかのであるなり具の中、初め入るなり
りたるなり松本崎といふ所の松本村なり 宗代より今も有る大津
村と仁井田村の境の川を墨根川と云ふなり云ふと云ふ有詩人蕭被
洞と号を累代わたりてその内、波打をきき有るなり此村の松本も
れ村なり故に松本入雲の松本なり

一 大津村 義公松前昆布を海中へ御まかせ被遊候所絶てなしと

云 今たまたまに大浪の跡にて渚へ昆布打上る事有と云 遠沖にも残
れるや 五浦より貝石出る外の所になし 貝の中へ砂の入りてかたま
りたるなり 松ヶ崎といふ所御茶屋場なり景地なり 末に図有 大津
村と仁井田村の境の川を里根川と云 チヤンポンと云所有 詩人簫鼓
洞と号す岩穴ありて其内へ波打込ミて音あるなり 此村御領分はな
れ村なる故出穀入穀の禁なし



赤水云大津村昔多尾塚と云此村と仁丹田村とある小長柄と云此
里家敷子形つゝ大津浪を云い之後小津年平方の地盤なる
と云

一ト橋井村、室曆十一巳年と郡井村の方名決あ村松の坊風
種あなる所よりと云多し

一橋原村の郷士野に市巻近年堤と大川川、二津七の放田
とと多くなりと云

一上橋井村百姓の流と云之より種物切者三分あり亦有年木
綿樹を植ふ所成長くともなり枯る由り也

一日柳村の三山の月石井地と云所より種物主出ると云

農佳年歳

赤水云 大津村昔鳥屋塚と云 此村と仁井田村との間に長柄と云所あり 家数千軒あり大津浪にて亡ひて後に近年平方の地繁昌すとなり

一 下桜井村へ宝曆十一巳年御郡奉行久方忠次衛門村松の防風種相廻為蒔候よし 今甚多し

一 磯原村の郷土野口市蔵近年蛭を大北川へ二升ばかり放候由追々多くなりたると云

一 上桜井村 百姓八郎次といへるもの植物功者二付安永六酉年木綿樹為植候所に成長いたし間もなく枯候由申出る

一 日棚村 御立山の内石井場と云所より焼物土出る 御留なり

一上子尾村千堂坂より下飛山なりし室暦四年堀初なるり月も
なぐやむ

一上子尾村故津ありたのこ山と云後より移りて云乎七年の
戸許を京より進出並領を元和八年歩野京へ移り同年の領を
する赤水作の常世遺すは慶長七年戸許を京より進出並領を
國と萬三子石小川七千石八藏居其時城狭小なり故荒川三年
居經三十年に徙移すと云こ松平郡國並に郡遷りてあり故に
一二のヤ村の海中大サウロ小サウロと云磯なり舟が難止之先手水村の
海士サウロ磯より一尺余の大地をてを江の海人も磯をたつた
るなり必し是為わの地をすといふと中合子尾の夫と云るなり利

一 上手綱村 千堂坂といへる所銀山ありて宝曆四年掘初たるか間も
なくやむ

一 下手綱村 故城ありたつこ山と云後に松岡と云 慶長七年より

戸沢右京少進政盛領す 元和八年出羽新庄へ移る 同年御領分と

なる 赤水作の常北遺聞に慶長七年戸沢右京少進政盛領松

岡三万三千石 小川七千石

代官小山
八蔵居此

其時城狭小なる故荒川二三年

居住シ十年ニ徙移スト云々

マ松岡郡凶并ニ郡鑑に委し故ニ略す

一 高戸村の海中大ザクロ 小ザクロと云磯あり 舟行難所也 先年水木村の

海士サクロ磯にて一尺余の大砲取りて近郷の海人とも呼寄せ次第ハかたら

す候得共必以来当所の砲取不申候様ニと申含 手綱の大高寺にて剃

髪す 其後あハひハ不取候と云 当所あわひハ名物のよし 安永六年

其事を庄屋へ尋候に大同小異あり 当組頭龍藏祖父伊豆国より

海人をかゝへ蛇を為取候事有 右のあまザクロ磯へ入不出事半日計

にて尺余のあわひを取上り此後蛇を此所にて取間敷と云て海中の

事をかたらず手綱の能仁寺にて剃髪道心者となる 右の蛇貝ハ能

仁寺ニ納今にあるよし語れりと云

澳^マ普請延享四卯願の上江戸より七人下り堀初る成就せずして

寛延三年春止む

一 高萩 安良川市年々九月なり 寛延二巳年より始る 安良

川八幡の宝物日の丸旗一流 卯花緘鎧太刀一振あり 社前大杉

あし日通も二丈六尺許り

一 秋山は先年温多野を白女を頼杖におふ坂右衛門の堀居
風よりまよふ温多野をまよふに止む右衛門の堀居
岩とせ勢火より勢ハ燃え別名炭が

一 水晶石名英雲女村より出た板石を云ふ

一 友部村古跡あり山田氏の堀と郡園を云ふ

一 伊師町村愛宕の堀より山を云ふ
ふ山々山阿の層粉の敷を云ふ
伊師町

一 伊師侯 堀電のりし道は深きほど磨き砂ありけるに粉を
是ハ海子船より岩山の中程に三層を敷いたの平阿を云ふ
伊師侯

あり目通にて二丈六尺五寸廻り也

一 秋山に先年温泉あり 向打にて頽敗に及ふ故右場所を掘据
風ろあり目通にて二丈六尺五寸廻り也

に立候所湿瘡疝氣に宜其後止む 右新湯の辺にブンドウ
岩とて暫火に入置けハ燃る也 則石炭なり

一 水晶 黒石英 雲母右村より出る大津板木山と云所也

一 友部村 古城あり山直氏の墟也 郡図にくわし

一 伊師町村 愛宕あり故ニいし町をあたこといふ人あり 伊吹山と

いふ小キ山あり 鴈鶉飼殺生を業とするもの多し

一 伊師浜 塩竈あり 此辺浜辺に磨き砂あり御留也 鵜取嶋

是ハ海に臨みし岩山の中程ニ三疊敷計の平あるを菰にてかこひ

王介、猪、是かじせのけつがまじし野あまう山を築き、村かこひの築
のらま、四五尺の年、まうものむせがうまをうまはし

一川尻村小貝塚とふま多利利つひるなりまう路をふ城

つう肉^ハ猪の名産つう元禄九年平浮村松延道庵とまのど

者村はまうまの、傳をひまうまうまうまうまうまうまうま

四動まうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま

一砂野村小畑なる砂野山木津、西の坂の中をまうまうま

一山木津村百燈寺、木綿村なる松小文とて、延いて、石路、松

る村、常水とる年

一田尻村、茶花の、中、まうまうまうまうまうまうまうま

叢書下載

其外へ鶉へ足かわをつけつなき置おとりにす 鶉来る時かこひの菰
の間より四五尺の竿へとりもちをからミ夫にてさす也

一 川尻村 小貝浜といふ所に色砂利あり御留なり てう嶋といふ磯

あり肉醬タキの名産あり 元禄九子年平潟村松延道庵と云ものより

当村津衛門といふものへ伝を御うけさせ其年よりたゞき製法す 年々

御献上ニなる津衛門ハ当庄屋藤左衛門祖父なり

一 砂沢村に細なる砂出る 小木津へ通る坂の中ほとなり 御留也

一 小木津村 百姓介左衛門へ木綿樹為御植小丈ケニ延候て不残枯候よし

為蒔候ハ安永六酉年也

一 田尻村ニ栄蔵小屋とて海中ニ小キ島山あり上ニ小祠あり はだか

崎ぐと崎二崎つりさ中記に和りの高くて 大田尻とらさか

なむうそさう崎々々いあう〜浪のまきと 鯨穴とて体高の

岩窟ニ深々穴をく〜その高地う〜ま〜あう

一き田村神嶺山さ山と寛政四年の〜キ此村の〜う〜ま〜あう〜中

の別をのをう〜今う〜を止ま〜う〜は〜庄を決ま〜う〜う〜

を山におそ〜う〜し〜たをま〜う〜てま〜う〜い〜い〜う〜れ〜と〜

わ〜い〜を〜あ〜う〜〜に〜遊〜を〜ら〜村〜も〜多〜ル〜れ〜と〜是〜非〜よ〜と〜を〜ま〜う〜

山頂におお〜う〜と〜日〜と〜あ〜う〜〜い〜〜〜一〜着〜お〜福〜は〜る〜も〜ま〜あ〜う〜

〜う〜〜〜〜い〜〜を〜あ〜う〜〜と〜あ〜う〜〜い〜〜一〜只〜山〜を〜あ〜う〜〜い〜〜

ぬ

嶋ぐミ嶋 二ツ嶋あり 道中記ニ西行の歌とて 大田尻ころもハ

なきかはたか嶋 かせのひるひる浪の草まで 鮫穴とて海辺の

岩窟ニ深キ穴有り 其所景地なり末ニ凶あり

一 宮田村 神嶺山高山也 寛政四子のとし予此村のやとりに着候頃申

の刻はかりなり 今より登山すへしといへは庄屋次三郎今より

登山ハおそかるへしあした登れと云てしきりにいなミけれども

朝ハ露ふかくことに巡れる村々も多ければ是非にとて登れり

山頂に至れば日も西にあかねさし暮靄たなひきける所もあり

てくわしく写すへくもあらねは只山々の方位をのミしるし

ぬ

ものなし 権現へ詣ふてゐるにハ前の日よりゆあミ切火して登る事に
なんあるにかく日暮におよひて事なく下山する事のありかたさよ
といへり 夫をも知らず強て登れる事村長の心のうちおしはかられぬ
山道けわしく登れる時よりもくたりにハいとゝなやみて大雄院へ至
れば火ともしころ過にそなりける 庄屋の組頭へいへるに暮ぬ前ニ
灯持て大雄院までむかひに出よといゝ置たれば来りぬらんとく聞て
参れといふに 組頭いちはやく立戻り少し先に火を乞ふててうちん
ともし立出ぬと寺にていへるよしなれとも 此山道ハひとすし故迷ふ
へくもあらずいかゝしつらんとミなミなおとろけるさまにて其もの
を呼めくれとも更にこたへもなし 扱ハ神かくしに逢ふたるなるへしと

しきりにさかしもとむれとも見へされハ組頭と其外の人々をのこしたつ
ねよとて予ハ庄屋をあないにてやとへかへらんと大雄院の門前大杉の
たちこすミたる所八町ほと行過ぬ 其所二人家二三軒あり軒下に提灯
をともし置けり 庄屋立より見ればむかいに出たるおのこ縁にあし
なかくふミ出し小唄うたふてやすミ居たり 庄屋何とて爰にハ居た
りといへハ日くれたる故山へものほりかたく此所に待居たりといふ 夫より又
たつねにのこしたるものを呼なとして戌のこくはかりにやとりにつ
きぬ 明けの日諏訪村に至り きなふハかくかくの事ありて大わらひし
ぬと語りけれハ庄屋徳右衛門いへるハ 次三郎の心遣ひいたしたる事なミ体
の事にハあらさるへし 此辺にて中々夕かた登山なとすへきものなし

三四年已前にかミね山へむらのもの薪取につねに人の至らぬ山奥に

至る 薪を伐らんとて斧をふり上げしか斧動かさる故ふりかへり見

れは大なるやまふし其斧を握り居たり 斧をはなし驚きおそれ

て打伏しけれハ斧のおとひゝきて打伏たる頭の前へ投落しぬる故

其斧をとり跡をも見す我家へ戻り斧を見るに斧の刃かべ斧の柄を

さす穴の所をかべといふ由の所へ丸くなりて付ぬ 其斧を徳右衛門したしく見たるに其形

人力ハさらなり火にかけ槌をもて打たるともなかなか曲るへくもあら

す思わると云 かくの如き事たまたまありてミなミな天狗のわさ也と

ておそるゝ事なりといふ 予か其時召連し僕ハ入四間の生れにて嘉介

といへり 年の頃五十にあまれるか年若き時四人にて入四間山へ木を伐

小いへりききせんをこまきかしたまふてゆ原るゝむり
 ゐる大杉ゆきまの倒せうれに三人のまゝにけりてまゝゆき
 者へんまゝゆきまの倒せうれに三人のまゝにけりてまゝゆき
 へんまゝゆきまの倒せうれに三人のまゝにけりてまゝゆき
 せまぬぬえりてまゝゆきまの倒せうれに三人のまゝにけり
 てもまゝゆきまの倒せうれに三人のまゝにけりてまゝゆき
 いまゝゆきまの倒せうれに三人のまゝにけりてまゝゆき
 上公の御筆

青子の葉はあつても
 命はあつても
 六月のまゝの葉は
 青の葉はあつても
 命はあつても
 六月のまゝの葉は

青の葉はあつても

にいたり 昼やすミせんとして足なけ出したはこ吸ふて咄居たるにむかふ
なる大杉風もなきに倒れかゝれハ三人のものハあわてふためき逃出し
宿へかへりぬ 嘉介ハかせもなきに倒るゝ事もあるましけれハ倒るゝ如く
見ゆるのミなるへしと思ひ居たるか やかて倒れかゝると見へしか正気
を失ひぬ 先へかへりし三人のもの嘉介の帰らぬを心もとなく思ひ尋ね
来るに杉の木ハ倒れす嘉介ハもと居し所に絶入て居たりしを さまさま
いたわり正気付たる事ありとかたりき 此前年 上公の御筆
を以て育子の弊風あらたむへきの命ありて 予六月の半に農事の
ひまある時村々をめくりてむら毎に百姓妻子迄をものこりなくあつめ
て教諭せし時介川村に至るに村長のいへるハ兵四郎といへるものきのふ

馬を牽て朝草刈に山へ至りしに帰らざる故 人々打つとい山を尋し
に馬ハつなき置て兵四郎ハ見へす故に村内のものけふもたつねに出
たれば打寄もの少しといへり 其夜介川に至り兵四郎ハいかゝそと尋し
に四日過てもとの所に帰り居たるを見当りてつれかへり 四日の間いか
なる所に行たりと問しに何も覚へす只うつとりとしたるさまなりけるか
程なくつねの如くなりけるといへり 怪力ハ語るましき事なれと山鬼など
のかゝる事をなしぬるかいふかし
赤沢と云所ニ銅山あり 願有て度々掘初しか悪水なかれて田はた損
するとて止む 鍾乳石出る 介川境ヤツコフシと云所に有宿より二十七人
丁あり 又大雄院クワツガンセンよりも出る 天童山大雄院客殿の鴨居の

上とさくらるるの表もろく至きか、想を時登るも付り一夜のち

又天狗帯して破るさうふ 新以三命を、あむおの杉の名産を、

友部系泉寺ハ大木の杉のうぬく東家寺ハ杉とおろく老也寺ハ東

泉寺の杉も送三 仰付とたたるう、高寺ハ十景一

大白峰 觀海寺 獅子峰 猿戒壇 中峯 七賢洞

鉢盂峰 活眼泉 虎溪 三笑橋 清溪 清閑橋

屏峰 杉徑

唐桑の是意 義三 大木の品は御海神と云はるの品

と此寺は清孝附わしと先、位持の品は失良と云 寛政四年位持の品

~~~~~ 白年、以係用、細也

養正十歳

上を一間畳の表にてはり置其外ハ壁也 皆壁にする時ハ一夜のうち

に天狗来りて破るといふ 義公の命にて当所ハ杉の名産なり

友部東泉寺ハ大木の松山なれば東泉寺へ杉をおくり当寺ハ東

泉寺の松にて造立 仰付られたるよし当寺二十景あり

大白峰 観海亭 獅子峰 猿戒壇 中峯 七賢洞

鉢孟峰 活眼泉 虎溪 三笑橋 清溪 清関橋

屏峰 杉径

唐桑の見台 義公 大樹の御所望にて御講釈被遊候節の御品

を此寺に御寄附ありしを先々住持の節紛失すと云 寛政四年住持の話

うら白年々御飾御用ニ納む



宮田 介川 会瀬 諏訪 大久保 金沢 瀬谷辺砥石出る

一 介川村 高鈴山 松岡郡中の高山也 眺望の図末に記す 此

山并散野の内オク朱有之堀候事有 金山堀跡も有

一 会瀬村ニ伊勢ヶ崎御茶屋場有り ハツサキ嶋 鶉嶋 七夕磯あり

元禄十丑同十一寅年当浜へ 義公生海鼠を為御放被遊 今ニキン

コギンコとて有 古ハ此村相賀村と云しを元禄十一寅三月会瀬村と

可改旨被 仰出 是ハ海面ニ南北より波の打合候所あるによりてなり

少しの舟懸りの澳あり 度々普請あれとも成就しかたし 白玉子石

あり

一 諏訪村ニ有水穴 本郷より一里計高山の麓ニ有活水洞なり

洞中言水名のぬき石窟なり。圖二三祠もわくく一寺ありて  
 又低き亦ありくく里に入せば又度々あり云乎ハ不玉屋  
 窟る事... 頃ハ長と云古万年也此所入と云出と云結  
 古もの神ニ万年也と云もの。画像あり自画の中白人  
 史の事像あり老人の面之白髪有烏帽子袴衣の事  
 あるもの也名たり 義公右の像あり在興古像ハ神也ハ入  
 せしむぬの裏あり

常州多珂郡諏訪神祠有萬年大夫藤原高利夫婦像  
 年久朽弊今新命工改造二像藏故像其時中以會持来  
 元禄三年歲次庚午十月吉日 水戸漢源完圖識

叢桂亭藏

洞中寒水石の如き石窟なり闊二三間もあるへし 少し行て

又低き所ありくゝりて入れハ又広き所有と云 予ハ不至深サ

究る事あたハすといふ 古万年大夫此穴へ入て不出と云伝 鎮

守すわ明神二万年大夫と云ものゝ画像あり 自画の由 同人

夫婦の木像あり 老人の面にて白髪折烏帽子狩衣のやふ

なるものを着たり 義公右の像御再興古像ハ体中へ御入

させ被遊御裏書あり

常州多珂郡諏訪神祠有万年大夫藤原高利夫婦像

年久朽弊今新命工改造二像蔵故像其体中以垂将来

元禄三年歳次庚午十月吉日 水戸侯源光圀識

右万年前史と云ふ入出不詳此の年を經信承... 後史也  
しに名穴よ入て新海知進と云

義方より湯谷附の赤三 御懐劔一腰 狸ノユイ一 竜ノ石一

義方より湯谷附の赤三 八咫宝鏡一面 元禄年中皇御意

二名あり 水戸府下士散位從五位上前右京大進拍宿禰近

章

宝劔一振 杉田孫大史貞将献

普賢嶽屏風石と云ふ石壁に水穴ありあり

一久保村より石美也其昔程と云ふ所より槍竿と云ふ所より

地心今村と云ふ加買と云ふ地心 風穴の山中に

右万年大夫と云もの出所不詳 此所二年を經住居して後夫婦とも  
もに水穴に入て行衛知れすと云

義公より御寄付の品三 御懷劍 一腰 猩々ユイ 一 竜刀石 一

義公より被 仰付奉納の由 八咫宝鏡一面 元禄年中奉納裏

二名有 水戸府下士散位従五位上前右京大進狛宿称近

章

宝劍一振 松田孫大夫貞将献ル

普賢嶽屏風石といへる石壁あり 水穴より南なり

一 大久保村より石英出る 菩提と云所なり 橙年々御飾御用ニ

納む 今ハ村ニ無之故買上候て納候由 風穴あり山の中段也

穴の傍に玉色の風吹く物に穴中塵きおき又階子をけりて上れ  
そ一版又平あつた多し毛乞ふ深き穴を井戸と云はうふも井の  
如し山名を以て投するは四方にけりて漸くさきへ  
りふよ此の秘跡山なるつききりぬ水変りてくまを水の  
流るるるし如し風生るるるるる

一河原子村 海濱の四條を地わく元禄十二年二月トコブシ  
甲子盡 西山の江戸より海やへなる故(秘)海濱ニ

オサガメ 時ニナリレドウ 二の神 此の神 兼路 大治 三 ササキ 磯 とらふく

一金沢村 金山秘跡わく

一水布村 美園船宿のり遠ナキサとて白くり石出る金山

養正年

穴の傍江至れハ風出る様也 穴中広き所有 又階子をかけて上れ

は一段又平なる所有り 其先に深き穴有 井戸と云 いかにも井の

如し 小石を以て投入るに四方へあたる音して漸々ニ音聞へす

思ふに此所諏訪山などのつゝきなれハ水穴のことく下を水の

流るなるへし故に風生すると見ゆ

一 河原子村 海浜に御茶屋場あり 元禄十三辰二月トコブシ

四十盃 西山公江戸より御呼下海中へ為御放被遊海浜ニ

オサガメ 島也ヤクシドウ  
とも云津明神有

一ツ明神 島也明神  
ハなし

米嶋 大嶋 立子磯と云有り

一 金沢村ニ金山堀跡あり

一 水木村 異国船番所あり 遠ナキサといふ所ニ白クリ石出る 金砂

大業礼の対の田乐ゆめり 海中ニ大磯 サクよふ磯さう

元禄十五年 義公未釋を乃放遊ひりておし

泉の神を泉川とて神の四手流にを水の中を流る傍を

とてお考をけしとてまひき出る神の神那に此中より

物あひといひゆ 義公の命は天の速玉姫の命を配し

ておききまんとて 信をまねの神より少し上りてまのまを

しお下りし 此處漢名初薩川尻村日影のつら有 此村を倉体後

長治も和文茶茶也 義公より此のより 達磨の坐を

り画ハ 湯子とやゆりし 漢 求心無處見

當下便心安早知灯是火 断臂定完全 如雲拜賛 如雲はく 未証

大祭礼の時の田楽場あり 海中ニ大磯 サクといふ磯有り

元禄十丑年 義公赤螺を為御放被遊候よし 今少し

泉明神有泉川といへる明神の御手洗也 常々水中水湧出る傍にて

手を打声をかければ甚わき出る 明神の神体ハ此中よりわき

出玉ひしといひ伝ふ 義公の命に天の速玉姫の命を配し

て祭れるならんと被 仰と云伝 明神より少し上りてミかの原と

いふ所あり 此辺日影のかつら有 漢名松蘿川尻村 此村庄屋佐藤

善次衛門祖父善左衛門 義公より拝領のよしにて達磨の懸物あ

り画ハ 御筆と申伝たるよし 讚ハ 求心無処覓

当下便心安早知灯是火断臂定完全 如雲拝贊

如雲何人  
未詳



一 久慈村 大磯 トケ磯あり 中洞といふ所に砂鉄あり 鎮守

大甕明神石山の上ニ祠あり

一 田尻村に度志観音あり 弘法大師岩屋へ彫付候よし

一 平磯村の磯の名 海老磯 磯前 二有 尻懸磯 鶉の磯 鯨磯

仲間磯 三ツ磯 烏帽子磯 高磯 千畳磯 今大ヒ 清浄壇 ラ磯と云

大棚 胎内石 丁子吉 高楯磯 塚有 貝磯 磯前 しゝミ磯 同上 獅子の前

畜生浦 磯前 赤坂浦 同 銅磯 海中 難所 大縄磯 大小 まんぐわ あり 海くら

鬼隠石 客神石 鏡磯 今不知磯 火打磯 との磯 の名

火縄磯 三ツ磯 沖くら 尋瀬 海中ニあり

一 西河内中村辺にいゝづくと云木あり 紙漉にねりの替りニ

用事

一山北矢指村迄の海は經の組と云海産ヤノ經の河さきに  
月いふ妙こと云

一石神内岩村より下りて小舟渡り常力多系二處迄も一光  
二水三丙子の内望と曰十年又喜つる事切名ニ化夜中ノ  
事由之新也云

一里川ハ原里川新田より出る川鮎の名産あり

一兩夜の外ニ此内名を以 義之擲の 安友ニ統り  
撰定抄抄名を以て是ニ云二不

村松 那珂湊 青柳渡 笠河山 稲田神社 正木浦 浦

用る木也

一 小野矢指村辺の海に経の紐と云海藻あり 腹のあしきなとに  
用ひて妙也と云

一 石神内宿村 与頭十郎衛門所持 小野崎帯刀藤原秀道より寛

永三丙寅の年営と同十五年又左衛門より道筋切石ニ仕度由申

来候由ニて願出相済

一 里川ハ源里川新田より出る 此川鮎の名産なり

一 雨夜の伽ニ御領内名所を 義公様より安藤主税<sup>江</sup>被仰付御

撰定被指置候名所の覚三十二所

村松 那珂湊 青柳渡 笠間山 稲田姫社 正木浦

十八道坂 那珂川 岩谷観音 塩子村 大洗磯 神社 金砂山

武多山 高多山 白羽山 神社 玉簾瀧 寺 袋田瀧

若栗牧 千沼湖 波佐加湖 族建橋 水木 瀧

碓氷 大森 飯沼 薩都社 子波池 瀧 古内里

増井川 里川 黒根山 何しろ 岩船社 静社

此三十二ヶ所をいひて十八道坂と云ふべし何れを云ふべしと云ふべし

穿鑿してりるも石名坂と 西山公ノ仰石名坂の文字十八

道坂と云ふ所と云ふ意と云ふ名も石名太田蓮花寺日兼十八道坂

の御歌持々由牝女方ニ云付有之雪之 十八道坂雪

ゆき雪の夕なきを十八道坂と云ふは決めおとすべし 日兼

叢桂真藏

イシナサカ  
十八道坂 那珂川 岩谷観音 塩子村 大洗磯 神社 金砂山

武弓山 真弓山 白羽山 神社 玉簾瀧 寺 袋田瀧

若栗牧 干沼湖 ヒスマ 波佐加湖 旗野桜 水木 浜 清水

緑岡 大森 飯沼 薩都社 千波池 蓮 古内里  
柳堤

増井 小川 里川 黒根山 何レヲ 岩船社 静社  
云ヤラン

此三十二ヶ所の内二十八道坂と云有り 何レを云やらんとあなたこなた

穿鑿してけるに石名坂を 西山公ノ仰ニ石名坂の文字十八

道坂と書直候様ニと御意ニて則其節太田蓮花寺日乘十八道坂

の詠歌指上候由 慥成方ニ書付有之写之 十八道坂雪

ふる雪の夕はさひし十八道坂 はるかに沢のおとはかりして 日乘

是日癸酉十月五日田中内村、西山大君御如詩經、以書之付口  
是日兼讀之抄之中、此書之以書之、此也、族姓名、以書之

是ハ癸酉十月五日田中内村へ 西山大君御成詩歌ノ御会の時御前  
にて日乗読て指上候由也 此処ニ御会へ罷出候族姓名あり略す

南郡 寛政六寅年同九已直迄中の字記

一 川和村、道均池と云々、親孝法談と云云、城於河、春

秋庄、修る居、任の、一、風、記、は、戸、屋、行、通、房、如、築、と、云、云、部、塚、

云、河、春、秋、並、部、糸、娘、二、人、の、骸、埋、と、由、横、川、と、云、川、河、孫、柳、洞、

日、和、不、然、の、時、を、呼、物、は、る、事、を、と、云、

一 木多中村、児と養と云々、おと、紫、石、河、と、云、る、と、

一 大橋村、鉄、河、と、云、新、具、と、云、お、う、と、云、外、を、と、云、清、と、云、と、云、者、

任せる

一 古河村、清、と、云、源、海、宗、清、と、云、と、云、東、山、南、村、と、云、附、属、と、云、

と、云、と、云、河、山、渡、屋、大、和、為、小、田、氏、部、少、輔、の、子、也、文、保、二、年、入、宋、

叢書

南郡 寛政六寅年より同九巳年迄の中の筆記

- 一 川和田村ニ道場池と云有親鸞法談の古跡のよし城跡あり 春  
秋尾張守居住のよし風土記ニ江戸弥太郎通房始築と云 兵部塚と  
云あり 春秋兵部並娘二人の骸埋候由 桜川といふ川あり 膳棚淵  
日和不順の時なと鳴物する事有といふ
- 一 木葉下村 児ケ墓と云所に紫石あり御留也
- 一 大橋村 館跡あり龍貝リウカイと云所なり 外岡美濃守と云者  
住せるよし
- 一 下古内村 清音寺臨濟宗清音寺ハ京東山南禪寺附庸にて  
無本寺開山復庵大和尚小田民部少輔の猶子也 文保二年入宋

中峰國師と号し、もろ暦三年陽明休妙の時、侯子名子世と云傳ふ  
 休休系家と云 義方は眞と云、其外は物事、其を全生と云、  
 天正八年信太右衛門山判友全戦の時、判友利と云、清  
 言と、述ふ山名、進東と火を放つと、守是と云、焼亡と判友の、  
 北がく孝中善海庵と云、切後と石研と名川、錦と云、滝、深常  
 為信、名左大村縣瑞輝寺住持、紹勲大檀那、從四位下前、廣、岐、守  
 源朝臣孝朝、應安五年壬子四月五日と云、  
 寺内十境  
 獅子岩 錦鏡池 蓬莱嶋 龍吟水 白蓮池  
 白蓮橋 白蓮峰 驪竜潭 紫雲嶺 補陀岩  
 彦和、茶、沼、和、林、と、云、年、と、敷、と、と、生、餘、と、賣、と、上、品、と、三、斤、中、不

中峰国師を師とす 嘉曆三年帰朝佐竹の時寺領千石千貫と云伝ふ

佐竹系図有 義公御奥書あり其外書翰等あり岩屋堂あり

天正八年信太小太郎小山判官合戦の時判官利あらずして清

音寺へ逃る 小太郎進来て火を放つ 寺宇是か為ニ焼亡す 判官のか

れかたく寺中普濟庵にて切腹す 石碑上宿川端にあり 鍾銘常

州信太庄大村県瑞雄寺住持紹融大檀那從四位下前讚岐守

源朝臣孝朝応安五年壬子四月五日とあり 寺内十境

獅子岩 錦鏡池 蓬萊嶋 龍吟水 白蓮池

白蓮橋 白蓮峰 驪竜潭 紫雲嶺 補陀岩

産物茶銘初梅と云 年々献上す其余りを売る上品一分二三斤 中品

七ヶ所と云

一 臨子村伊也言能心室世院あるに御申の十八丁阿多  
 布の十二面親音利基の作前之十一面色んめん江法の作のほい  
 岩倉より中依三つ縁宗の地より地上より親考を土基と云す  
 五丈八尺と云慶長三年 後為必院之倫昔勅額あり中興天正  
 年中一耳山教導上人武田信虎二男なりと云

按ニ信虎の二男ハ左馬次信繁なり一ハ二男まゝなりと云

養正寺藏

七斤位と云

一 塩子村 仏国寺高野山宝性院末寺也 郷中より十八丁あり  
本尊十一面観音行基の作 前立十一面くわんおん弘法の作のよし  
岩屋なり中段ニあり絶景の地なり 地上より観音堂土台迄高サ  
五丈八尺と云 慶長三年 後陽成院の倫旨勅額あり 中興天正  
年中開山教導上人武田信虎二男なりと云  
按ニ信虎の二男ハ左馬介信繁なるへし二男にハあるへから





一赤松村と石切の碑石あり

一開江村 雑詠あり 其に在るは右任のより 塚を言はし塚を云

一高野村 湯也産也 摺壁を云むと湯山を云り 村は若湯塚

一高代村 下湯温泉八百目 代金を由り此邊の村はききき 桐を

業と云ふ業之区故業たることこれれ業と云ふ業の業はききき

一丸うらむ 四世八万石を在りて代下を及任はあききき

一觀世音村 十一面觀音岩 塘付に佛新あり 徳一大師彫

刻と云信

一石川村 縁石の版あり 寛文五年己酉此の版より連立也

高枕身 縁石の版と唱神崎八景の田縁を夜雨の詩歌あり

叢書正藏

一 亦熊村より石出る碑石にす

一 開江村 館跡あり開江彦太郎居住のよし 塚有馬返し塚と云

一 高野村 錫を産す橋壁と云所也 錫小屋あり村の者錫掘

納侯者代料被下錫一貫八百目二代金一匁也 此辺の村々きさきミ煙草を

業とす 葉不冝故葉たはこにてうれ兼る故農間の業にきさきミ

にてうる也 四貫八百匁一箱にして代三分一兩位に売るよし

一 観世音村二十一面観音岩へ掘付たる仏体なり 徳一大師彫

刻と云伝

一 見川村 緑岡御殿跡あり 寛文五巳年此山へ御殿御建被遊

高枕亭緑岡御殿と唱 神崎八景の内緑岡夜雨御詩歌あり

陽高き善法の時丸山、小西寺中末持之寺の教抄、陶磁の佛像  
等居造別個の堂と唱り、今其傍に杉を植へて云

一 吉田村の神宮、陸下八社の内常玉子三宮なり、日如武為と  
名あり、口末不抜山名

一 磯邊村 天妃神 元禄年中、越祥師神請、毎年三月廿二  
日、兩日此礼、磯邊磯邊、陽年中持と祝、河洗濯、尾と黄色あり  
之年中、此礼あり、近享四年、年之、以、此、成、寛政五、五月、洗濯  
尾、名目、此止、以、事、此、成、尾、と唱

一 磯村 鈴鈴、是、中、與、田、中、形、於、住、居、由、今、淨、之、中、あり  
天神社あり

緑岡御普請の時丸山へ小キ御亭出来狸々亭と御額掛り陶淵明の像を御居被遊則淵明堂と唱候よし 今其傍ニ有橋を狸々橋と云

一 吉田村 明神常陸二十八社の内当国第三宮なり日本武尊を

祭る御朱印十五石

一 磯浜村 天妃神元禄年中心越禪師勸請毎年三月二十二日

三日両日祭礼 湊磯浜隔年持也 祝町ニ洗濯屋とて売色あり

先年御潰ニ相成候処延享四卯年又々御免ニ成ル 寛政五丑五月洗濯

屋の名目相止以来遊女屋と唱

一 湊村 館跡有是ハ中興田中刑部住居の由 今浄光寺中ニなる

天神社あり

常州那珂郡湊邑素有菅廟我熟視之非菅氏神宮設來  
安佛像異物所以除去新命東條常言彫刻彼像鎮坐  
社内云

元禄乙亥春 源光圀蕭具御印

成公より若くは志守の画像一幅寄附也

一上名崎村親氏ニ一ツねき

義方内親とて 子とては涙目ぬき一ツねき 浪子とて世に幾代

経ぬらん 一説とては乃の文字と親氏のみ云

一少領村古江戸渡邊 市原と有る元文二年長江渡邊に必

市原と有る引く也

叢桂亭藏

常州那珂郡湊邑素有菅廟我熟視之非菅氏神宮誤來

安仏像異物所以除去新命東條常言彫刻彼像鎮坐

社内云

元禄乙亥春 源光圀肅具 御印

成公より菅家真筆の画像一幅御奉納被遊

一 上石崎村 親沢ニ一ツ松有り

義公御歌とて 子を思ふ涙ひぬまの一ツ松浪にゆられて幾代

経ぬらん 一説ニ子を思ふの五文字を親沢のと云

一 小吹村 古江戸往還にて御殿も有之所 元文二年長岡往還ニ成

御殿も相引ケ候由

一 城と田村古傳記を以て村元某松年古學以て其を定むる  
 亥自七月廿四日村の山に現るる 其為、柏の木の古の跡を以て  
 一 寺の田村系福を卷上りて其を記念するに粟判友也を非の  
 像を二つを 義公九山雲平に 竹骨山家と系を以て遊り上人六  
 字の衣を以て系を以て号を漫福に記せしが畧を

一 小幡村古傳記城之とて其の郡系を載る故を以て畧を  
 子也橋と云々くく

一 古新村の家の川九十九曲と云傳し 其の川水廻り川系  
 長く其の水為る故曲り多く其の流を以てと云水の長を以て  
 其の流系を以て其の流を以て其の流を以て其の流を以て

- 一 城之内村 古城跡有 此村元來松平大學頭様御領分也 寛永四  
亥年七月谷田部村と御引替ニ成る 公義へ拘り候節は谷田部村を書出ス
- 一 鳥羽田村 円福寺ニ卷上り不動有 龍含寺ニ小栗判官照手姫の  
像とて二ツ有 義公丸山雲平ニ被 仰付小栗の系図あり 遊行上人六  
字の名号有系図ハ予か漫録ニ記せる故略す
- 一 小幡村 古城跡城主の事郡図に載る故爰に略す
- 千貫桜と云さくら有
- 一 下吉影村の前の川九十九曲と云伝ふ 義公川水細く川筋  
直くニては水落早き故曲り多く御掘らせ被遊候と云 水門にて水を留  
置舟へ諸品種（積）候て水門を開き其水勢にて北浦へ下る

一 中川村坊地蔵の石を運送方行のうらまに於て見ゆ。此は中川  
三町とて大町横山田若と云ふ見地蔵寺なり。

一 大村村若八巻と云ふ親秀上人四十言集の時表八巻、旅巻の時  
表陀十二光佛一幅若守大師志願一幅重法大師口形一幅を云し  
て表八巻のうらまに所指す。 此は以上三書とて表一宗の若  
志願も亦有り云云。

一 聖塚遺蹟浄土三昧妙典經の巻代表卷之十三の四紙あり。も  
稀小經名出と云。 此はも塚 親秀唐崎行行の時休息  
の古紙若草とて一根二生の草なり。

一 和漢三才園會三飲良坊先社名有等八者委座天而出天却入新羅無職親爲聖人多葉  
小石自書三部經之埋之塚以念仙既而飲怪不再見一發大喜食授法典八送聖人之返至

叢桂寺藏

一 小川村 故城跡有 今運送方役所ニなる城主等の事郡図ニ記す 小川

三町とて大町横町田宿を云 赤見地藏堂あり

一 与沢村ニ喜八堂と云有 親鸞上人四十六歳の時喜八宅へ旅宿の時

弥陀十二光仏一幅 善導大師真影一幅 聖徳大師御影一幅を書し

て喜八にあたふ 代々所持の所 義公御うら書被成下置今以一宗の者

遠国よりも尋来る旧跡也

経塚親鸞浄土三部妙典経小石へ書供養有之たる旧跡 今も

稀に経石出ると云 すくも塚 親鸞鹿嶋へ行脚の時休息

の古跡箸芦とて一根二生の芦出候よし

一 和漢三才図会ニ厭良坊先祖名有与八者妻産死而幽霊劫人祈禳無驗親鸞上人多集

小石自書三部経文埋之塚以念仏既而妖怪不再見一族大喜僉授法与八送聖人帰至

本根原薦亦飲無延麻棟又毛宇草代造而後縣函院善導及聖徳太子画像化生塔  
 今在之堂亦跡有八咫宗为天台延宝之末國主水戸黄利見三軸画像且謂善八曰社昔因縁  
 人善所知而社代改宗也志思失本也善八悔非即为種入寺弟子刺髮号殿我坊蓋須  
 久毛宇者名祀第留皇乎似前而大草也

一 芥沢村此村江古荒原今可至徑自中芥沢氏亦為芥沢之村也

此村居徑至分芥沢村と云彼沢わり芥沢之祖多氣隱岐守良忠築

ふるり此が麓亦為原為志と云不毛芥沢之家居徑の初由

志の事也此が麓亦為原為志と云不毛芥沢之家居徑の初由

而芥沢氏古治野多り

手奪川 定正之以芥沢俊経河童の子と切て皆接の者方也

一 手奪川の御り云 遠志傳 旭昇と云河 毎年五月吾躬芥沢氏

万理の世也出芥沢事也及芥沢の御事云云百々河邊と云わ

赤根原薦赤飯無筵席採須久毛宇草代筵而後賜弥陀善導及聖德太子画像御経塚  
化生塚

今在之至末孫喜八改宗为天台延宝之末国主水戸黄門見三軸画像且謂喜八曰往昔因縁

人普所知而近代改宗也忘恩失本也喜八悔非即為願入寺弟子剃髮号厭良坊蓋須

久毛宇者石竜芻今云足  
久毛乎似藺而大草也

一 芹沢村 此村往古荒原郷なり至徳年中芹沢氏相州芹沢より下向

此所へ居住其時より芹沢村と云 館跡あり芹沢の祖多氣隠岐守良忠築

たるよし 此外筑前屋敷原屋敷と云所有芹沢の家臣居住の跡の由

前山丸峰侍屋敷根小屋少齊一石田四本長岐屋敷宇屋敷

等芹沢氏の古跡数多あり

手奪川テバイカハ寛正の頃芹沢俊軒河童の手を切て骨折の奇方をおし

へ手を乞ひ帰りしと云 遠志沢旭阜と云伝  
又旭沢とも云 毎年五月五日朝芹沢氏

百姓一同此所へ出藁草を取芹沢より潮来への道二百里海道と云所有



二十二ヶ村入合の原也

一 蕨村 館跡あり山中屋敷経塚等古跡あり

一 若海にも館跡あり

一 玉造村 故城跡あり郡鑑並郡図ニ委し

一 一ツ松同村高須新田ニ有高一丈余廻り十七間余

一 谷嶋村ニ館跡有長三十間横二十間程也

一 浜村 東福寺本尊薬師聖徳太子作 義公尊慮を以元禄年

中より薬師開帳常行三昧の法会被 仰付八月十二日より七日ツ、年々

市相建候所他領の市へ指合等有十月朔日より同十二日迄年々市相立

常行為御助精先年より小見せ物御見捨の事

一 川中子村 敏記云 玉皇八敏の内と云信

一 玉皇村 敏記云 亦古旧所 一 形塚 亦玉皇八敏の内と云

井 亦玉皇云 井の内

一 玉皇村 敏記云 亦玉皇八敏の内と云 形塚 亦玉皇八

敏の内と云 井 亦玉皇云 井の内と云

一 玉皇村 敏記云 亦玉皇八敏の内と云 形塚 亦玉皇八敏

の内と云 井 亦玉皇云 井の内と云

一 寛倉村 了得平ニ 三和杉又 敏記云 亦玉皇八敏の内と云 空や上人 爲安の

康 亦玉皇付 此村 敏記云 亦玉皇八敏の内と云 亦玉皇八敏の内と云 亦玉皇八敏の内と云

強たる後 埋る 亦玉皇の由 八房 亦玉皇の角 亦玉皇の角

- 一 川中子村 館跡あり玉里八館の内と云伝
- 一 下玉里村 館跡三ヶ所右同断 船塚四ヶ所 玉里八艘の内と云
- 井三ヶ所玉里六井の内
- 一 上玉里村 館跡一ヶ所玉里八館の内と云 船塚三ヶ所玉里八艘の内と云 井二ヶ所玉里六井の内と云
- 一 高崎村 館跡一ヶ所玉里八館の内と云 船塚一ヶ所玉里八艘の内と云 井一ヶ所玉里六井の内と云
- 一 宍倉村 馬場平二三本杉又鞍懸松とも云 空也上人寵愛の鹿煩たる時此松へ鞍をかけたると云 堂山といへる所ニ松あり右の鹿殞たる後埋し印の松の由 八房了海所持の鹿の角ハ此鹿の角也

と云付 中村の地は昔は隈谷と云く郡禮に詳なり

一 中倉村 庄名久野定 内柱をく月包を七尺を寄りて

一 田伏村 敏治を田伏次と云と云者屋伝の也

一 殿中村 古の秀隆と云と云者と云と字のふに敏治あり

長八十間余 核あり余 中之云所も敏治あり 長甲間余 核あり余 田中と云所も 長八十間余 核あり余

長八十間余 核あり余 五秋塚と云余を是に元文元辰麻生に田境講し首に

塚を坊にせし炭賣之權利あり田境塚なり

一 清水村 大山寺次と云電八景の碑あり 居電より明正堂

地也 自古王侯自有山莊名園而豪富之人亦設家園

或別荘以為遊樂之所皆聚奇石名木以作假山泉池然而

卷之三下載

と云伝 右村ニ城跡菅谷隱岐守築く郡鑑ニ詳なり

一 安食村 庄屋久助宅ニ肉桂有り 目通にて七尺一寸廻り也

一 田伏村ニ館跡有 田伏次郎太夫と云者居住の由

一 富田村ハ古の香澄郷なりと云 霞と云へる字アサの所ニ館跡あり

長八十間余

横二十間余

中山と云所ニも館跡あり

長四十間余

横三十六間余

同所ニ馬場あり

長百五十

間余横

三間余

千秋塚三十余有是ハ元文元辰麻生富田境論の節此

塚を掘候得は炭之有勝利ニ成る御境塚なり

一 清水村 大山守次郎兵衛宅ニ八景の碑あり居宅より眺望景

地也 自古王侯自有山莊名園而豪富之人亦設家圃

或別莊以為遊樂之所皆聚奇石名木以作假山泉池然而

祇有庭中之少景而迤遠方之多景者鮮矣常州大峰生風  
采雅致其所居名松清齋卷簾眺望則名山大川悉落于睥  
睨之中總四方八勝奇景云尔因得京師紳縉名家之詩欲彫  
石建諸庭際以傳不朽遂謀余之乃謂曰去京千有餘里而有  
若人而作若事者豈不奇哉八詩成迺錄其官位姓名以還之  
云 肯安永乙未京兆香川景與謹書

潮来秋月

南溟

四 过前大知言藤原公享卿

潮来村前明月南月光夜々無潮来素輝何處最堪賞霞浦秋清  
江水隈

富田落雁

卷一

藤波三位大中臣季志卿

祇有庭中之少景而延遠方之多景者鮮矣常州大崎生風

采雅致其所居名松濤齋卷簾眺望則名山大川悉落手睥

睨之中總四方八勝奇景云尔因得京師紳縉名家之詩欲彫

石建諸庭際以伝不朽遂謀余々乃謂曰去京千有余里而有

若人而作若事者是亦奇哉八詩成迺錄其官位姓名以還之

云 時安永乙未京兆香川景与謹書

潮来秋月

南溟 四辻前大納言藤原公享卿

潮来村前明月開月光夜々興潮来素輝何処最堪賞霞浦秋清

江水隈

富田落雁

養一 藤波三位大中臣季忠卿

江甸秋深肥稻梁，相呼群雁下斜陽。誰家遠寄天涯信，字字寫雲為雁行。

芙蓉積雪

涪州

即解由小路左京權大夫蔣原近光鄉

何來嶺色海雲端，突兀三峰封雪看。庭暑滿堂頻欲醉，炎天積素射人寒。

浮嶋夜雨

峨眉

千種三位源有改鄉

蛇崎雲影靜難閑，夜雨蕭蕭逐浪來。風起蓬窓燈火亂，明朝賈客待晴回。

海了晚鐘

景貫

正四位下以并備中少輔太神名景貫

落照半含霞浦浦鐘聲漸動花，玉臺歸帆幾點波濤面。憶送

叢桂亭藏

江旬（旬）秋深肥稻梁相呼群雁下斜陽誰家遙寄天涯信字々写  
雲為幾行

芙蓉積雪

滄州

勘解由小路左京權太夫  
藤原近光卿

何來嶽色海雲端突兀三峰封雪看避暑滿堂頻欲醉炎天積

素射人寒

浮鳴夜雨

峨眉

千種三位源有政卿

蛇峰雲影鬱難開夜雨肅々逐浪來風起蓬窓灯火乱明朝賈

客待晴回

海了晚鐘

景貫

正四位下山井備中介姓  
太神名景貫伶人也

落照半含霞浦開鐘声漸動梵王台歸帆幾点波涛面隱々送

将海月来

霞浦帰帆

光興

姓從四任北波也

晚霞蘇浦明燒浪斜日暹林光射鷗多少風帆歸盡去西巖只

有一漁舟

筑波夕照

北海江村較

字君銜門昔任今上

中天積翠筑波山影落平湖濺灩河朝景何如斜景秀紅霞隱

映白雲斑

音取晴嵐

清絢

清錦北文之為仁福并君

長流沃野區中生曉色蒼涼望更清日出神宮烟霧動松杉深

處一鳩鳴

将海月来

霞浦帰帆

光与

従四位下松波播磨守  
姓藤原院北面也

晚霞蘸浦明烧浪斜日逗林光射鷗多少風帆帰尽去西巖只

有一漁舟

筑波夕照

北海江村綬

字君錫称伝左  
衛門昔仕今上

中天積翠筑波山影落平湖激灩間朝景何如斜景美紅霞隱

映白雲斑

香取晴嵐

清絢

清田文与名曰絢字君  
錦北海之弟仕福井侯

長流沃野画中生暁色蒼涼望更清日出神宮烟靄動松杉深

処一鳩鳴

安永四年之冬以松濤八詠與香川先生之序文刻石於庵中以謀  
 不朽於永年也。有客曰：嗚呼！義乎是設也。抑四方之壯觀而子秋之  
 義談也。何有於其不朽矣。夫松紳名家之著述，片言隻語苟得之  
 也，華衰之褒不啻也。而况揄揚於吾人之愛者哉。蓋詩由景以播  
 不朽之藻於海內也。景由詩以揚不朽之跡於日邊也。若於不朽之  
 隆事，則可不謂無與二哉。夫然後不朽其不朽，則賢主人烏有謝曰  
 僕不敢當已。而客去笑顧，如其言不可廢。然乃載筆也。  
 一、此松村政博、此松村長國、此松村長國、此松村長國、此松村長國、  
 一、上戸村曹洞宗長國寺也。正觀寺。  
 予得得古佛聖觀音壹軀，加莊飾，寓附常州行方郡上戸村長國

松濤齋  
 大崎安通

叢桂亭藏

安永四年之冬以松濤八詠与香川先生之序文刻石於庭中以謀  
不朽於永年也有客曰嗚呼美乎是設也抑四方之壯觀而千秋之  
美談也何有於其不朽矣夫搢紳名家之著述片言隻語苟得之  
也華袞之褒不啻也而况揄揚於吾人之賞者哉蓋詩由景以播  
不朽之藻於海內也景由詩以揚不朽之跡於日辺也若於不朽之  
隆事則可不謂無与二哉夫然後不朽其不朽則賢主人焉爾謝曰  
僕不敢当已而客去矣顧如其言不可廢然乃載筆也

松濤齋  
大崎安通

一 嶋崎村 故城ハ嶋崎左衛門築く事ハ郡鑑郡凶ニ委し

一 上戸村 曹洞宗長国寺本尊正観音

予偈得古仏聖観音一軀加莊飾寄附常州行方郡上戸村長国

禪寺現住鈍林和尚安置正殿云

元禄年

源光園御前

一 此寺在東村の石碑あり

真言宗觀音寺中興開基大旦那内藏頭平國安と云傳

一 潮来村臨濟宗長勝寺古鐘あり元徳庚午年録倉圓覺寺妙

節長老の長清直鐘の銘ハ清孤和尚と作古鐘ハあり此當村

用ひ鐘ハ為の鐘あり此鐘亦なり此鐘斗を杖物に建立の禮授

のり一 文治梅と云梅を此寺に賴朝が植ふるなりヤ傳るなり

此物もハ重の白心元木ハ朽れあたらし此寺後の根をい云東京

種の肉柱あり朽かりたり

古鐘銘

三 此寺藏也

禅寺現住鈍林和尚安置正殿云 元禄年 源光圀御判

一 嶋崎左衛門尉の石碑あり

真言宗観音寺中興開基大旦那内蔵頭平国安と云伝ふ

一 潮来村 臨濟宗長勝寺古鐘あり元徳庚午年鎌倉円覚寺妙

節長老の節鑄直し鐘の銘ハ清拙和尚の作古鐘ハおろし置當時

用ひ候鐘ハ別の鐘なり記録等もなく此鐘計にて頼朝公建立の証拠

のよし 文治梅と云梅有これも頼朝公植られたりと申伝たるよし 座

論梅にて八重の白也元木ハ枯て前ニたをし置其後の根はへと云 東京

種の肉桂あり朽かゝりたり

古鐘銘 予摺て蔵す

常州國海雲山長勝禪寺鐘銘 有序

寺始於文治元年右大將殿時而立也迨今元德庚午百二十  
餘載乃為鍾舍殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏此責  
春等若施財新而大之任持妙節長老請於圓覺清拙叟為之  
銘曰

維古蘭若 長勝厥名 寸送微撞 今器未宏 爰命鳥氏

鎔範速成 鏗々旬々 殷雷吼鯨 香聞佛事 開聲啓育

大哉圓通 十虛廓清 霜天月曉 落景初更 真機普發

衆夢齊驚 深禪偃仰 吾趣休傳 客船夜泊 常陸蘇城

止延屠筭 下息戈兵 擅門茂盛 梵刹堅貞 海雲日橫

叢桂草藏

常州国海雲山長勝禪寺鐘銘 有序

寺始於文治元年右大将殿時所立也迄今元德庚午百二十  
余載乃為鎌倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏与貴  
春等共施財新而大之住持妙節長老請於円覚清拙叟為之  
銘曰

維古蘭若 長勝厥名 寸逞微撞 今器未宏 爰命鳧氏  
鎔範速成 鏗々訇々 殷雷吼鯨 音聞仏事 開龔啓盲  
大哉円通 十虚廓清 霜天月曉 落景初更 真機普発  
衆夢齊驚 深禪偃仰 苦趣休停 客船夜泊 常陸蘇城  
止延睿算 下息戈兵 檀門茂盛 梵刹堅貞 海雲日横

青山峰岫

人天師令

祖道遠亭

元德庚午十月一日書

通円圓月

道超秀光

貞種種三

清原高秀

妙勝妙龜

道妙淨円

定祐淨妙

行佛妙幼

如見妙一

妙西道實

願生願念

生阿弥五

定円善妙

清阿二親

寂仁上心

淨心随仰

了心妙円

祚運維那見道

大工甲斐權守即芝

住持傳法沙門妙節

大施主下総五郎禪門道暁

大檀那相模禪定門崇鑑

又沼林元祿寺中臥卷林名付録

上意之由云傳

青山峰嶸  
人天号令  
租道通亭  
元徳庚午十月一日書

通円円月  
道超秀光  
貞種種立  
清原高秀  
妙勝妙亀

道妙浄円  
定祐浄妙  
行仏妙幼  
如見妙一  
妙西道実

願生願念  
生阿弥五  
光円善妙  
清阿二親  
寂仁上心

浄心随仰  
了心妙円  
祚運維那見道

大工甲斐権守助光

住持伝法沙門妙節

大施主下総五郎禅門道暁

大檀那相模禅定門崇鑑

文治梅元禄年中臥竜梅と名付候様  
上意の由云伝ふ

藤新尾ハ新買色ワシ 唐尾平交宅ニ蘇鐵根ヲ出シ五尺

出寸目通シ三尺出寸ニ高五尺ニホカクニワサキ

此村ニ唐尾ニ二里程息極ニ出サシ 湧子、九里許

一大河新田ハ樹木ニ紅梅ニ多ク相志ニ柑子乃皮空相和及人

仁代ニ人首田ニ人九ノ女橘ニ

一 辻村新田ニ視老ニ神祈ハ新田ノノモニ出シ視ルノ一ニ路名

ト云云名ナクニ云カク中ノ新田ノモニ出シセリト云

一 延方村新田中ノノ霸王樹ニ根見四、三尺ニ寸枝百ニ十枚奈

酒崎ニ云不善ノ院中ニ地新茶海崎地新ニ云法給新田ハ元祿ニ

他取上細村ニ云取新海ノハ新田ニ延方ノ新田ニ云クニ云不

叢桂草子藏

旅籠屋八軒買色あり 庄屋平大夫宅ニ蘇鉄根にて廻り五尺

二寸目通にて三尺二寸高一丈五尺其外そてつ数多あり

此村より鹿嶋へ二里程息栖へ三里許銚子へ九里許

一 大洲新田 御樹木有 紀伊国蜜柑しらハ柑子 薄皮蜜柑 肥後ミかん

八代ミかん 有田ミかん 九年母橘有

一 辻村 鎮守硯宮と云神体ハ頼朝公の手にふれし硯のよし馬蹄石

とか云石なりと云 九月十五日祭礼の節見せると云

一 延方村 庄屋五郎衛門霸王樹有根にて廻り二尺二寸枝百六十枝余

洲崎と云所普門院本尊地藏等洲崎地藏と云 徳嶋新田ハ元禄六年

他領下畑村と土地争論の所御裁許にて延方の新田となる三十年ほと

以爲厄方村曲、移三石、出船十九艘、入る、有之、存を、ら、却、自、の、  
良、之、物、を、出、有、者、福、母、此、物、事、わ、ら、出、所、敷、故、又、ら、由、百、回、を、  
去、る、あ、ま、し、と、云、わ、ら、出、所、田、也、於、道、ま、し、ア、ゲ、と、云、わ、ら、板、が、  
三、石、一、繩、綱、也、も、を、後、切、麻、わ、ま、と、り、船、艀、を、爲、厄、方、船、の、  
大、船、毎、舟、十、八、丁、大、船、は、八、唐、船、の、積、十、八、丁、と、云、法、給、新、田、也、三、十、丁、  
一、塚、之、向、村、古、地、給、を、作、作、の、巨、山、也、大、船、築、く、郡、心、郡、港、也、  
一、他、姓、大、生、村、大、生、市、在、是、一、碑、を、た、氏、大、生、及、塚、と、云、爲、の、や、と、  
大、生、彈、正、平、定、守、廿、領、常、州、大、生、邑、自、先、祖、專、武、名、至、定、守、父、五、代、取、  
死、於、戰、場、其、後、仕、土、丹、大、炊、頭、利、勝、慶、長、十、九、年、趣、大、坂、役、十、二、月、十、  
四、日、病、死、於、駿、州、藤、枝、嫡、子、仁、兵、衛、定、仍、仕、利、勝、別、賜、祿、故、其、嗣、

以前延方村曲り松と云所へ廻船十九艘入候事有之庄屋五郎衛門幼年の

節見物ニ参候由 右の者祖母咄ニ潮来下へハ廻船数艘乗入候由百年ほと

も以前なるへしと云 今ハ追々新田ニ成ル此辺にてアヂと云て水中へ杭を

立是へ縄綱をはり袋へ本麻あミをはり置鯉鱸等を取 延方洲崎より

大船津へ舟十八丁大船津より鹿嶋の社へ十八丁と云徳嶋新田長サ三十丁

一 堀之内村 古城跡有 佐竹の臣小貫大蔵築く郡凶郡鑑ニ委し

一 他領大生村<sup>オラ</sup>ニ大生市左衛門の碑有 土民大生殿塚と云原の中ニ有

大生弾正平定守世領常州大生邑自先祖専武名至定守父五代敢

死於戰場其後仕土井大炊頭利勝慶長十九年趣大坂役十二月十

四日病死於駿州藤枝嫡子仁兵衛定仍仕利勝別賜祿故其嗣

家督利勝掌天下權之時刻國諸侯大夫有求欲告利勝者必令其  
仍達之某亦預利勝恩顧利勝卒時別有命令鞠育教誨幼子能  
登守利房安定仍慶豐三年病死甚今六旬有四餘年不錢雖不能  
立身行道欲揚名於後世以顯父母故表之

明曆二丙申年七月十四日 大生市左衛門 平定年

一 新崎防料十六崎之内上之崎第一之天經八匹之出馬由

在也其以八上之崎石田之云々云々者新崎之支所出也經入之有之  
新崎へる役也先し口量有聚致り所持、不中其口の上におり行方  
之不概之證又におぬ、何れも口持也。口是也其系ふ之云々人、之持也  
此度より新崎ハ八節川村内ト杭村ト徳村名出、牙ト杭村、有ハ

養正年歲

家督利勝掌天下權之時列國諸侯大夫有來欲告利勝者必令定

仍達之某亦預利勝恩顧利勝卒時別有命令鞠育教誨幼子能

登守利房矣定仍慶安三年病死其今六旬有四余年不幾雖不能

立身行道欲揚名於後世以顯父母故表石

明曆二丙申年七月十四日 大生市左衛門平定年

一 新嶋 御料十六島の内上カミの嶋第一にて其余ハ追々ニ出来候由

東照宮御代上カミの嶋石田主馬之介と云者新嶋の義訴出御繩入候に付右の

新嶋人馬役御免の御墨付頂戴致候所持候所中興御引上ニ相成御役人方

の印形の證文ニ相成候由仍て御猪狩 日光御社参等の節も人馬不指出候由

此度の御鹿狩ニハ八筋川村内ヤスチ卜杭ホツクヒと認村名書候ニ付卜杭村と有之ハ



十六島の外ニ有之間人馬指出候様御達ニ相成八筋川名主書振不宜候故達て

致訴訟候得共不相濟ト杭村分指出候由ニ相聞候上戸 牛堀庄屋の話

右の石田主馬之介の子孫清兵衛と申候由上の嶋の名主にて御証文も

致所持居候と申伝候

一 三ヶ村 四ヶ村 迎野田の続ニ有之 三ヶ村ハ一村の名 四ヶ村ハ下田 宮田

立延 中根是を四ヶ村と云 公儀より道杭等立候節向四ヶ村と書付候

右の立延 中根等の小名ハ無之由 前四ヶ村と云ハ川より南の方にて辻村 小

井戸村 大橋村 四ヶ村との事と云 四ヶ村の内より辻 小井戸 大橋分れた

ると見へたり 前四ヶ村の内ニ古四ヶ村と云一村も組入候て四ヶ村の由 野田

村庄屋忠之衛門話

一 完倉領近の村名有川 平塚 木田余と訓

一 角来村カクライの古福吉の部田に由る所以の深谷に四白考シロガキハ沼ヌもたむ

と云大山守市に福吉の部田境の川後之時又ハ此界の境焼之長人思

と他飲下田もも折出也。

一 桑谷村とらん橋を云ふ小枝橋を考すはら深谷を云はるる中記

又まゝり池と云ふとら城邊の古村の狭膚を考すなり也

一 大橋村の福田大洞が市毛公相も多る考ふる宗戸ハト市毛手

城宗戸を西町古所と考す

一 鯉淵村ハ小森山系市毛日考物也云々

菅生手藏

一 宍倉領近の村名有川アルガ牛渡ウシワダ木田余キタマリと訓

一 角来村カクラヒハ古稻吉の新田の由 鶴沼ハ深谷の内白鳥シラトリハ沼より南也

と云大山守市之衛門話 南野田境の川浚の時又ハ御立山境焼の節人足

を他領下田よりも指出候由

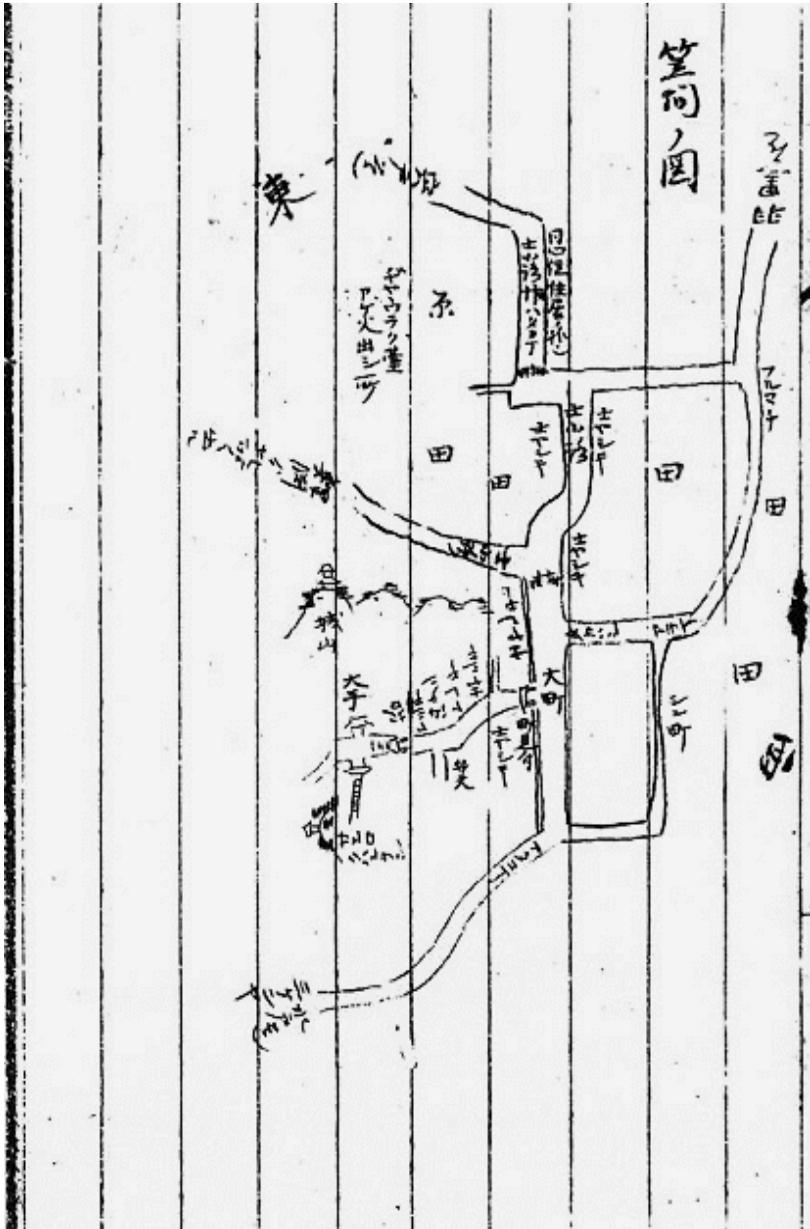
一 奥谷村 どうらん橋と云小キ板橋有 東ニたゝら沢と云沢有 道中記ニ

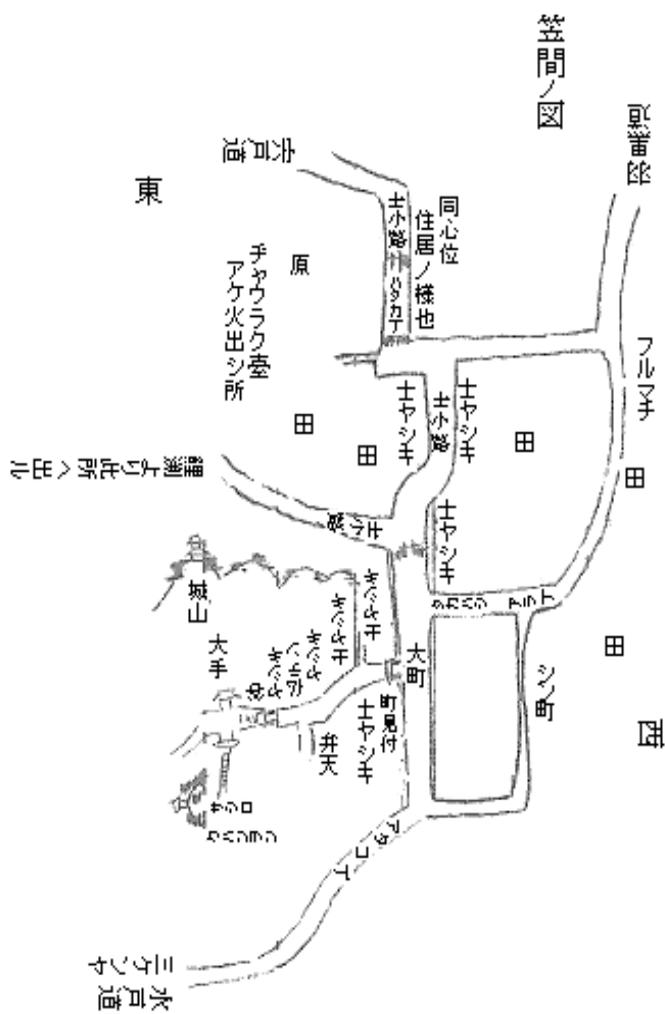
みそろか池と有と云 此辺の土中より鉄屑出候事有之由

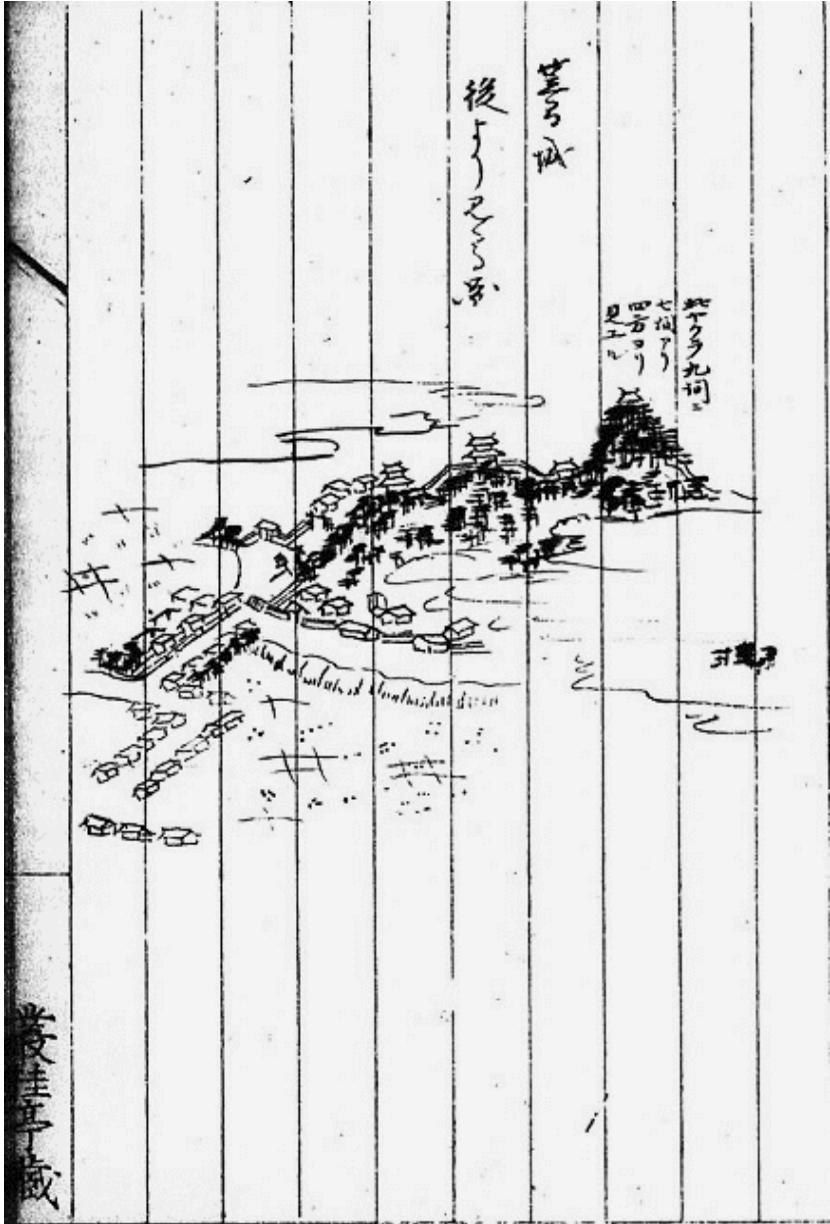
一 大橋村より福田大淵上市毛笠間に至る 笠間より宍戸へハ下市毛手

越 宍戸 太田町 古町へ至る

一 鯉淵村よりハ小林 小原 市原 日草場 笠間



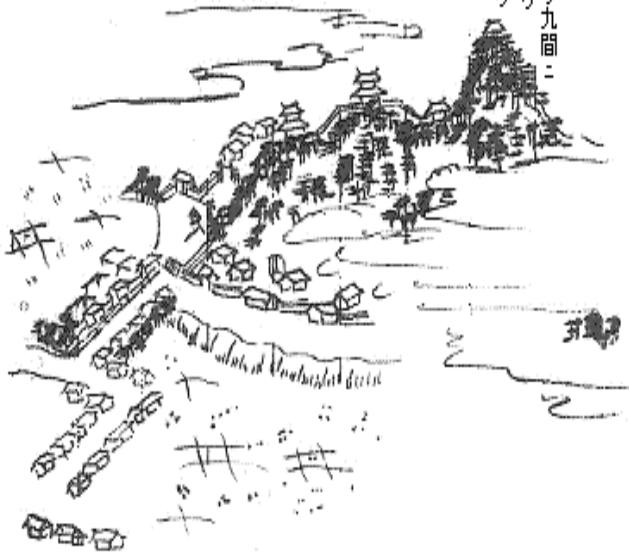




笠間城

後より見たる図

此ヤクニ九間ニ  
七間アリ  
四方ヨリ  
見ユル





屋敷の門々ニ宿札あり士小路ハ領主の普請と見へ塀なと一様なり 丸の内

大石内蔵之介居屋敷門を入れて右の方ニ有今嫡子の住居いたさるゝ由

家老千二百石大祿の由大石元屋敷の向ニ家老西郷十郎衛門住居大

手と向合ニ王門有大黒石と云 高六間大黒の後向の形と云内蔵之介

我像を彫かけし時国替の事御達ニて急キ江戸へ登りニ番家老へ頼候所

大黒に刻て今観音堂ニありと云

佐白観音ニ三重塔有 先年遠目かね相済候様領主へ願出候由の所水戸

の御城見へ候間不相済と申由所の者の話帯刀の者ハ脇指たりとも不入尤脇

指なしとも案内の者不付候得は不入候宿より案内出る一人ニても十人ニても五

十文ツゝなり人数何人と申を手形へ書記案内の者持参町見付へ納候よし

右一太郎三男と  
しりしは本意に  
信

豊前守の孫を帯びて大坂の女に入、是の女は小倉の位所の  
りし小倉の女と申す云

豊前守の孫を帯びて大坂の女に入、是の女は小倉の位所の

一、五、送、村、白、井、其、屋、名、を、勤、也、玉、送、占、一、寺、り、の、玉、男、も、子、孫、に、其、白、井

何、故、も、と、言、ふ、に、女、も、母、の、姓、を、持、て、五、送、に、隱、居、任、じ、也、當、小、倉、四、代、の、社

小、倉、と、言、ふ、大、小、倉、と、言、ふ、村、其、八、代、名、の、地、分、勤、也、と、言、ふ、は、一、社、に、大、小、倉

地、分、は、信、有、小、倉、二、代、名、也、信、有、と、右、に、小、倉、親、義、云、ふ、右、に、小、倉、親

浪、人、と、言、ふ、為、り、の、と、其、公、元、後、北、條、と、言、ふ、一、萬、石、金、四、百、石、也、其、物、は、池、田、有

一、万、石、と、言、ふ、上、中、と、言、ふ、也、其、中、若、く、は、其、金、子、は、も、く、は、其、持、り、者

後、に、我、が、故、也、其、後、其、為、氣、に、及、ぶ、所、出、方、は、其、子、と、て、其、者、も、其、人、を、其、所

叢書

案内の者ハ脇指を帯シ入レ大手よりハ女人不入在国の節も下屋敷ニ住居の

よし下屋敷丸の内ニ有と云

筧間より下市毛 手越 宍戸 元町 岩間 府中と江戸街道へ出る

一 玉造村 白井小衛門庄屋を勤む玉造与一太郎の三男の子孫也母ハ白井

備後守と云者の女にて母の姓を續て玉造ニ隠れ住候由当小衛門四代の祖

小衛門の節大山守与沢村喜八庄屋ハ惣介勤居候所喜八の跡の大山守

惣介ニ被 仰付小衛門ニ庄屋被 仰付候右の小衛門親 義公より召候所其頃

浪人立居候如何の事と安心不致罷在候処軍用金四百両所持の沙汰有

之間夫を御取上にも可相成と申聞候者有之其金子ハとくに遣ひ捨候如何

致可然哉致相談候所病氣ニ致不罷出方宜候半とて其旨申出候得は御医



師被遣金一兩二分と御夜着被下置候由御夜着ハ五所御紋を青く綾の如く

織込色々の染糸にて大縞ニおり其間ニ鱗の形を織る是ハ地と同く白ク

有之候 零落の節うらと綿ハ売払候て当時の裏綿等ハ追て拵候よし

西山公より涅槃の図一枚被下置候是ハ彩色間違ひて所々御指置書有之候

品なり右二品ハ今に所持致候一休筆唐詩江緑鳥逾白の一首を認

候古筆家極メ文通共ニ有義弘の短刀所持の由庄屋白井小衛門話ニ大山守

大場惣介ハ与一太郎の家来の由

他領西連寺村にて小衛門先祖の馬病候故其所へ頼置馬をかり帰候後小衛門

馬ハ斃候所其馬を西連寺村藤衛門と申者方にて祭り置候由不祭候得は

不吉の事有之鎮守ニ致置候藤衛門先祖ハ行方氏の家中とか云伝ふ

一 坊村大杉の神至極はるる事訪人も言ふに二町半の古俗  
 町にんん酒者亦多、嘗ては若海に終るに由町に極くお徳あり  
 多物乞ふ名を色八錢にて金打電ふに六尺半厚板五半とて葵  
 比段付なり、不社祠あり、その名はの苗也十町半、菓子少名相湯  
 枝にせある、切名の下も菓子食をなす、秋に水の中を舟に  
 社にても菓子食をなす、その方多名お徳あり、お徳あり、古に名は  
 豊後をなす、その名は坂あり、其の名は坂あり、其の名は坂あり、  
 と云ふ、その名は坂あり、その名は坂あり、その名は坂あり、  
 とも有り、澄珠を澄はふと云ふなり、

一 仲加村 峯崎 親言 桑原 寺 寺浦 三 崎 崎 親言 寺 寺浦 三 崎 崎

養正年藏

一 安場村 大杉明神至極宜宮立也參詣人も不断有之二町計の両側

町けんどん酒肴等家毎ニ売候道者泊り不絶有之由町も随分相応ニ相見候

名物せんへい有一包八錢ツ、金灯籠高サ六尺計慶安五年と有葵

御紋付なり本社銅瓦なり石の鳥居の両側十間計ニ菓子小間物楊

枝見せ等有切石の下にも菓子売有 鳥居の脇ニ手水有兩人付居る

社内ニも菓売出る右の方別当安穩寺相応の寺也鳥居の右者石垣

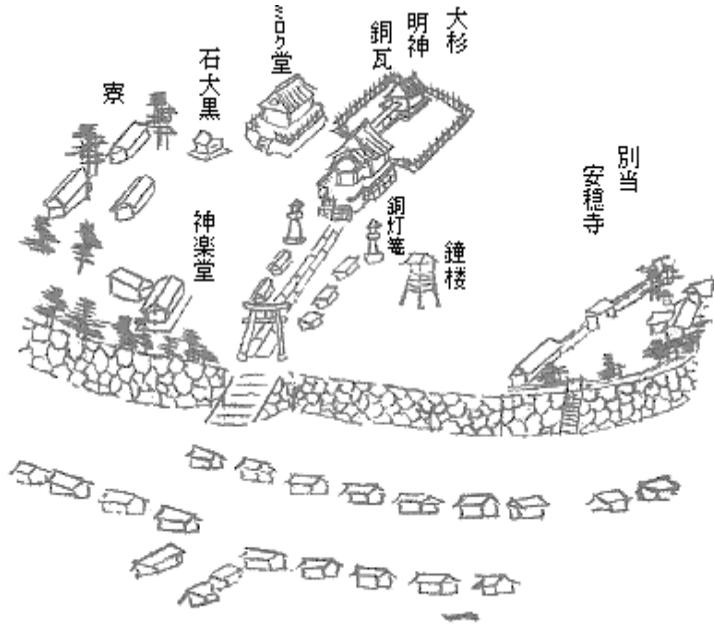
普請有左の方ハ半石垣なり惣て 公儀御ふしんなりと云 上野宮様持

と云左に弥勒堂是又よき普請也えり物瓦屋根にて六七間四方

も可有之鐘楼有鐘ハ不懸置候得キ

一 佐加村 アユミサキ 歩崎観音景地なり霞浦ニ臨む観音の宝物ニ金の機





道具有之佐加村百姓

名忘たり富  
田村庄屋惣

之実家 預かり置由也七月十五日二竜  
なり

灯あかる其夜籠り候者ハ見と云

一 霞浦 三ツ又沖二府中国分寺

の鐘沈居候由是ハ先年盗賊盜

取候て舟にて参候所船中にて鳴出候

二付恐れて水中へ投入候今に

夜中度々光り物有之里人はハ

右の鐘歸り度故ニ右の通り光

候と申伝ふ

一 洲子口より洲の移り、息物家也。又、汝海、在牛嶺、方水、  
道、也。

一 上石崎、在園、と云、おを古、古海、由、之、年、は、親、者、ハ、石  
川、口、也、也、二、王、八、村、移、り、也、也、中、中、傳、り、也。

一 秋島村人、系ハ、是、思、之、地、也、是、日、思、思、之、故、也、也、也、也、也、也、  
秋、島、村、人、系、ハ、是、思、之、地、也、是、日、思、思、之、故、也、也、也、也、也、也、

是、思、之、地、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

一 藤生、飲、大、生、的、神、ハ、大、同、年、中、に、移、り、也、也、也、也、也、也、也、也、  
藤、生、飲、大、生、的、神、ハ、大、同、年、中、に、移、り、也、也、也、也、也、也、也、也、

一 下、総、相、當、金、堂、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

叢書五下藏

一 銚子口より潮の指引ハ息栖前迄なり汐満候節牛堀前迄水ハ

通候由

一 上石崎 東田寺と云所有古寺跡の由先年御潰ニ相成観音ハ小石

川御庭へ曳る二王ハ村松へ被遣候由申伝候由

一 秋葉村 人家ハ足黒土地也先年足黒ニ御殿有之被 仰付候て引

越候由申伝右の節引替候事ニも可有之秋葉土地の内ニ本畠飛々ニ

足黒持分有之大山守五郎三郎話

一 麻生領大生明神ハ大同年中の鎮座ニて鹿嶋よりハ一年巳前の鎮

座と云 十一月十五日鹿嶋物忌来り年々祭事有と云ふ小社なり

一 下総 松苗金一両ニ一万四千五百本也寛政甲寅年也

一 麻路合神政集社如の神宮成文向の大船は、麻路の神に及根和寺、藤尾に

旧記と云ふ、細流に、琴川と云ふ中波越行と云ふ麻路の社と

要名丑才の方四丁、物忌辰と方十三丁、麻路の町、根和寺大

町中町、新町、東町と云、東西宮中と号、一里強、麻路の

息柳、三宅、三宅、三宅の社、丹喜、名、社、作、麻路の社の

皆白木、送、麻路の根、成、根、又、芽、生、う、写、田、前

其、所、ノ、ミ、ク、ロ、と、云、根、あり、江、戸、が、所、也、と、云

御齋、祿、宜三百名、東長門守、別当百三名、神宮寺、惣大行事二百名、鹿嶋

出羽守、護五十名、護国院、奉社家二十人、新社家二十人外、祿、宜

僧多し

祭神武甕槌神

一鹿嶋明神宮 戊亥向也 大船津より鹿嶋明神への道ニ根本寺鎌足の

旧跡と云 前ニ細キ流れ有鶯川と云寺中波越松と云有 鹿嶋社より

要石丑寅の方四五丁有物忌辰の方十三四丁有鹿嶋の町桜町 大

町 中町 新町 すみ町と云東西宮中と号する分一里余有鹿嶋より

息栖へ二里香取へ三里香取の社ハ丹青を以<sup>マ</sup>莊飾有鹿嶋の社ハ

皆白木造なり鹿嶋辺の松伐候得共根より又芽を生す富田嘉

衛門話ニフシクロと云松なり江戸本所辺ニも有と云

御齋祢宜<sup>三百石</sup> 東長門守 別当<sup>百三十石</sup> 神宮寺 惣大行事<sup>二百石</sup> 鹿嶋

出羽守 護摩<sup>三十石</sup> 護国院 本社家二十人 新社家二十人外ニ祢宜

僧多シ

一息柗の宮 西向の河の中より居るを男執女執水也と有  
 北平の水ハソトとも流氷入るを志水と云息柗ハ神子川口と  
 云息柗ハ東一里許業の心は息柗者為ハ身終三皇は是ハ  
 隆十八丁と云

北平の村國来知子と訓也

一加後海ニ十二橋をハ橋也

一休系ハ橋也と云とも云柗なる云ハ小橋仁也と云高野の者  
 わり

一香取の神ハ元月廿五日農人等ハ田植さし由  
 二三ハ商人為附也ハ後柗也

叢桂亭藏

一 息栖の宮西向也前の川中に鳥居有前二男瓶女瓶水中二有

此中の水ハいつとても湖水入らす真水也と云息栖より銚子川口迄

六里息栖より東一里許ニ業の池有息栖より香取へ舟路三里津宮より

陸十八丁と云

此辺の村国クニコセシツテ来知手と訓す

一 加藤洲二十二橋有小橋也

一 佐原ハ狭キ所也といへとも甚賑なる所也小堀仁衛門と云豪富の者

あり

一 香取明神にて四月五日六日農具市たつ五日ハ田植有之朔日

二日ニハ商人荷附込引続賑の由

一石崎洞沼浦長二宮十二丁核十二丁分古五丁也 浦中央口鏡分境  
分一依二廣浦と云川上と鏡川と云

一言久村誌多し社。惡路王と云

惡路王頭形年久敗朽今新彩飾安座高常洲高久邑安塚  
之社中云と 元祿癸酉歲 光園御休

其形王と云有縁起花と云田村將事其後王退治し其の塚

于其形を彫刻し社也卯申年久をり其形を其 其云云意

之右白丸花の彩飾也 竹等又社中 口御座と云其白丸花入

流雲波の白也と云御座たくましく雉髪より幾亦く沖白

髪等し相友云く安塚の古体塚と云御座二繩を二玉に似

一 石崎 潤沼浦長二里十二丁横十二丁より二十五丁迄浦中央御領分境

なり俗ニ広浦と云川上をヒノカハ簸川と云

一 高久村 鎮守の社ニ悪路王の頭有

悪路王ノ頭形年久敗朽今新彩飾安座常州高久邑安塚

の社中云々 元禄癸酉歳 光圀御印

悪路王の頭有縁起左ニ記す田村將軍悪路王退治し玉ひて後

其頭形を彫刻し社内へ納候由年久敷事故朽損す 義公尊慮

にて太田九蔵へ彩飾被 仰付又社中へ御納被遊候頭形白木箱へ入

浅黄服紗ニ包む其面体たくましく雉髪にて髭永く伸ひ白

髪なり祠官云く安塚ハ古休塚と云拝殿ニ木像ニ軀有二王ニ似

て二王が初夜に云夜叉神と

悪路王縁起

人王五十代桓武天皇ノ御宇延暦二十年辛巳陸奥國夷賊高  
丸達谷窟ヨリ起リ駿河國清見関ニテ攻上ル征夷將軍坂上田村  
原重行ヲ賜リ進奈々高丸退テ奥州ノ引籠ル田邑麻呂緒ニ  
奥州ノ攻入合戦ニ神樂岡ト云所ニテ射殺ス又悪路王ト云賊モ平  
クト云々 但延暦辛巳ヨリ安永八亥迄一千三十三年ニナル

享保十巳年九月 成の上流に遊む

追加

東渡以来五年以て陸奥國橋本庄迄の社々多しと云々あり

養正年歳

て二王ニあらず祠官の云夜刃(叉)神也と

悪路王縁起

人王五十代桓武天皇ノ御宇延暦二十年辛巳陸奥国夷賊高

丸達谷窟ヨリ起り駿河国清見関マテ攻上ル征夷將軍坂上田村

磨節刀ヲ賜り進発ス高丸退テ奥州へ引籠ル田邑麻呂続テ

奥州へ攻入合戦シ神楽岡ト云所ニテ射殺ス又悪路王ト云賊モ平

クト云々 但延暦辛巳ヨリ安永八亥迄一千三十二年ニナル

享保十巳年九月 成公上覽被遊候

追加

東鑑治承五年以常陸国橘郷鹿嶋の社に寄奉ると云事あり



橘郷の事を小宮山昌秀二問しに是即和名抄の茨城郡立花

郷にて今の行方郡羽生村ニ御座候土人も橘郷と申伝へ橘明神と申も

御座候其上大祢宜と申所ニ館跡御座候今ニ除キ地少々計有之鹿嶋大祢

宜羽生氏の所務ニ御座候さすれハ神領となりし時大祢宜此地ニ館を構

居候故苗氏ニ羽生と申と相見へ候今の沖洲八木蒔倉数辺迄皆橘

郷中ニ可有之城より行方ニ入申候ハ何年の事坎相知不申候

御改正南郡絵図ニ霞郷可尋と御書置被成候所此度霞郷ハ富田村ニ

御座候証拠を慥ニ見出申候猶跡より可申上候右の通小宮山氏より申来

故郡鑑をも見しに富田村館跡ニ霞といへる字あり橘郷も羽生村御

立山の字アサニも橘と云あり鎮守も橘明神と云 富田村霞郷の事前ニ記置候

一 木葉下村淺倉坂より、三度栗阿の所の花球と結ぶ。此又花  
 きを花球にうつり、又むさくさくして三度栗阿の花に、種よりぬき、  
 一 若も美い、青南海より、古丘の洞へ、寄く、寄く、七十名月、こゝに  
 此は、種を抄と、抄と、うつり、うつり、うつり、うつり、うつり、うつり、

一 七年田と、栲と、木村と、くして、二十日、栲と、きり、きり、きり、きり、  
 ころ、ころ、ころ、ころ、栲と、きり、きり、きり、きり、きり、きり、  
 又、紅花を、作る、村と、ハ、花、栲と、田、栲と、同、比、比、比、比、比、比、  
 土、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、抄と、  
 通、い、あ、つ、又、子、種、ハ、た、の、栲、旬、ハ、中、程、ハ、よ、ろ、ろ、ハ、は、虫、行、く、と、

一 大、陸、人、の、用、水、留、木、坂、ハ、慶、長、十、五、年、唐、成、何、茶、留、木、坂、忠、次、坂、

叢書年藏

一 木葉アホケ下村 鎌倉坂と云所ニ三度栗あり初の花毬を結ふ比又花

さき其花毬ニなる比又花さくしかれ共三度めの花ハ毬にならぬといへり

一 蕎麦ハ土用後十日より二十日迄の間に蒔く 蒔てより七十五日目ニハ見  
すに鎌を持て出よと云ならハすよし是も土地によるへし

一 近年田を植るに村ニよりて三十日植と云事はやる 是ハ苗代を仕付  
てより三十日過て植る事なり田の多き所ニてハ手繰りよろしとて植る

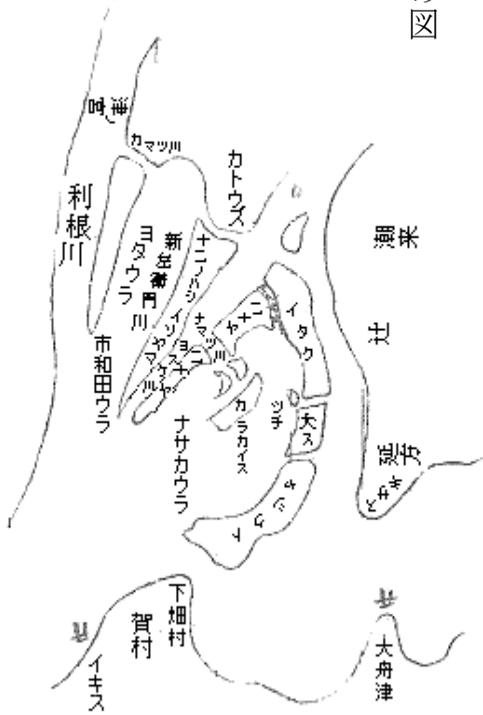
又紅花を作る村ニてハ花摘と田植と同じ比なる故専ら三十日植をする也  
土地ハ少しやせる方なりと云常の植旬ハ五六十日目迄也是も村ニよりて  
違ひあり 又早植ハ常の植旬その中程ハよろしからず虫付と云

一大野郷の用水備前堀ハ慶長十五年庚戌伊奈備前守忠次掘



たるなり普請下奉行鈴木金平夫普請の次第八下大野村平戸大膳指  
図なり

潮来向の図





浮嶋向の図



一 玉造村庄屋白井小衛門伊勢参宮に登り近頃下りたる故尾濃ハ勿論其



近国土地よろしき事を尋しに十一二取と云土地ハ此方の五ツ取位の土地

と見ゆるなり 五ツ取の土地へ三雜石其外諸懸り物を加ふれハ十一二取の年

貢納と同じ程なり 上方筋ハ田ハ米畑ハ畑米とて納め外ニ諸懸り物なしといへり

百姓の体を見るに家居小サク奇麗ニ衣服も常ニハ龜服なれともはれなる時ハよ

き着服なりと云 農業の出精いふ計なし朝ハ星をいたゞきて出夕も星を見て

帰り田畑の端々少しの所ニても何ぞ植付る也 七歳八歳より十一二歳の子落

のとうをとりて串にさし旅人ニ買くれよとひたものすゝむる故旅中いらぬ物

なから一錢二錢のあたへにて求れハ傍なる子も買くれよといふ故左程ハとゞ

のへさるよしいへハ泣出して頻に買ん事を乞ふ故所の人に何故にかくの如きと問

ハ其子ともハ百姓又ハ村役人の子もあり錢をとらすにかへれば隣の子ハ錢をとり



歸しに汝ハ錢をとらずとて親々の怒りに逢ふ故なりといふ故不殘買たる事

あり 此辺などにて役人の子ハ勿論百姓の子とても一錢二錢を乞ありきなハ親々

もいやしき乞食のさまなりとてのゝしりしかるへし 又農業に出るにも朝ハ日

出し後煙草吸なから鋤打かたけて出昼も草臥れは昼寝もしつ夕ハ日の

入る頃にハ帰り休ミて一生を終るなり 是を上方筋の如く農業出精せは

皆々富有となるへし 中国筋にて此地の如くおふちやくせは中々くらしつゝ

くる事ならず 左すれば上方筋よりハ此国などハ上国といふへし

といへり 上方筋にてハ前年何反何畝耕して食物不足すれハ当年

畝反を減し夫たけこやしたすけを多くかくると云 此辺にてハ去年

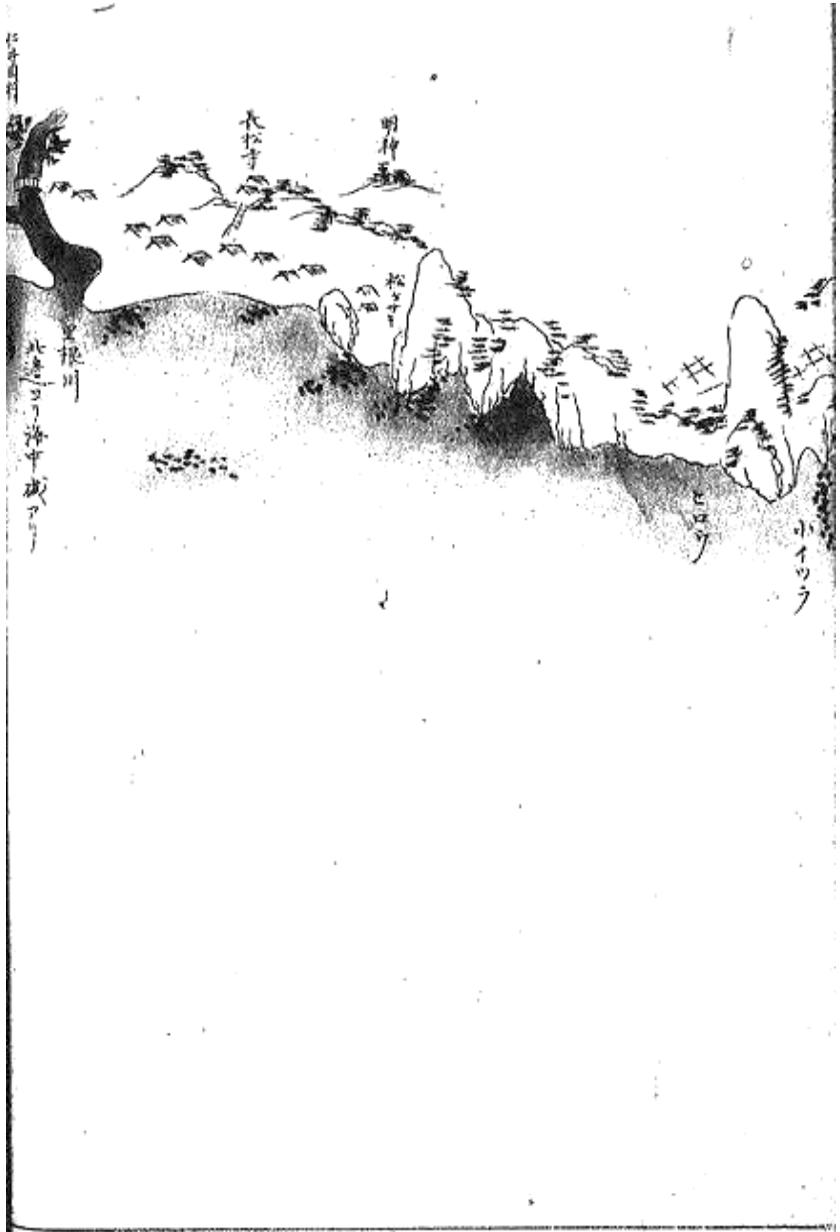
食物不足すれハ当年ハ田地を増し請作なとして耕す故こいたすけ

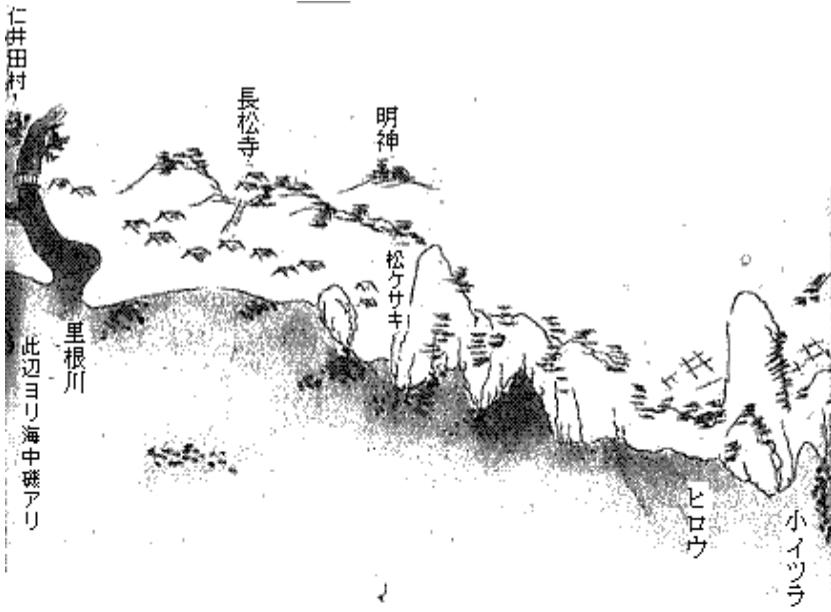
とけとくは耕作とて大庭の如く  
あつたはたしむるに  
あつたはたしむるに  
あつたはたしむるに

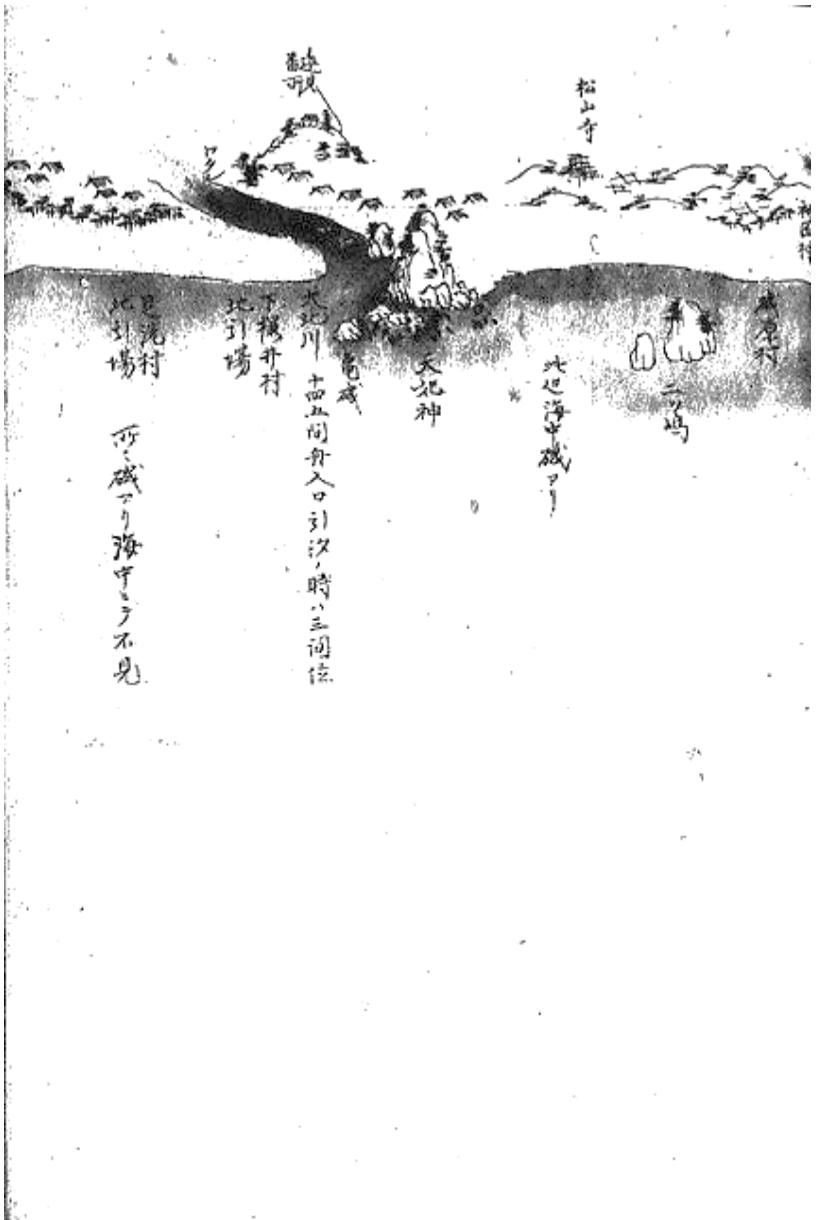
も行とゝかす耕作も土地広き故  
龜末ニなり収納ニハ左ほと過し  
せさる  
なり是等ハ尤の事なりとかたりき

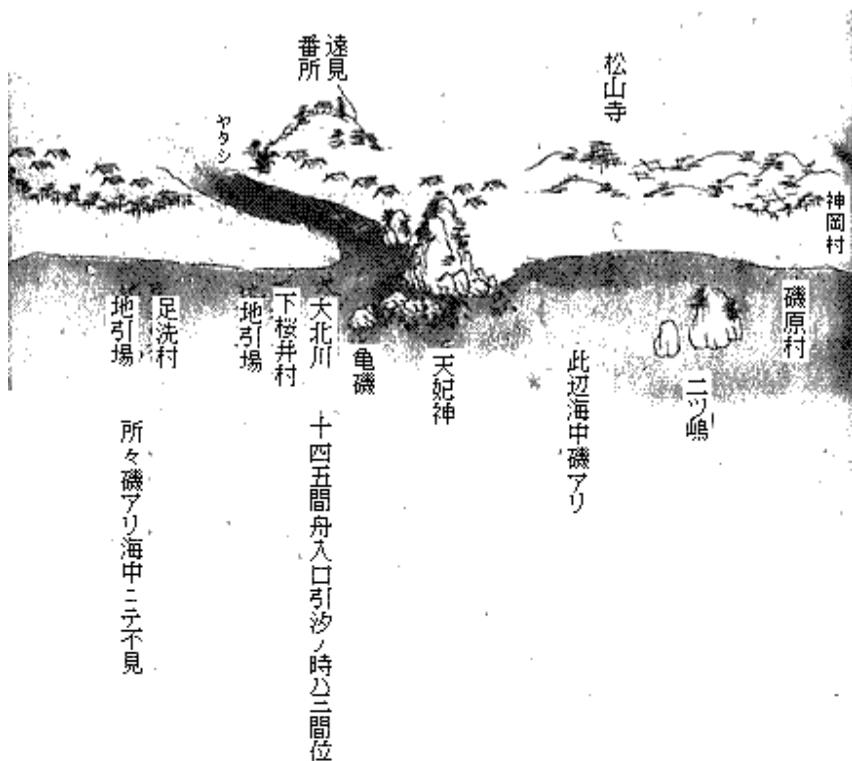


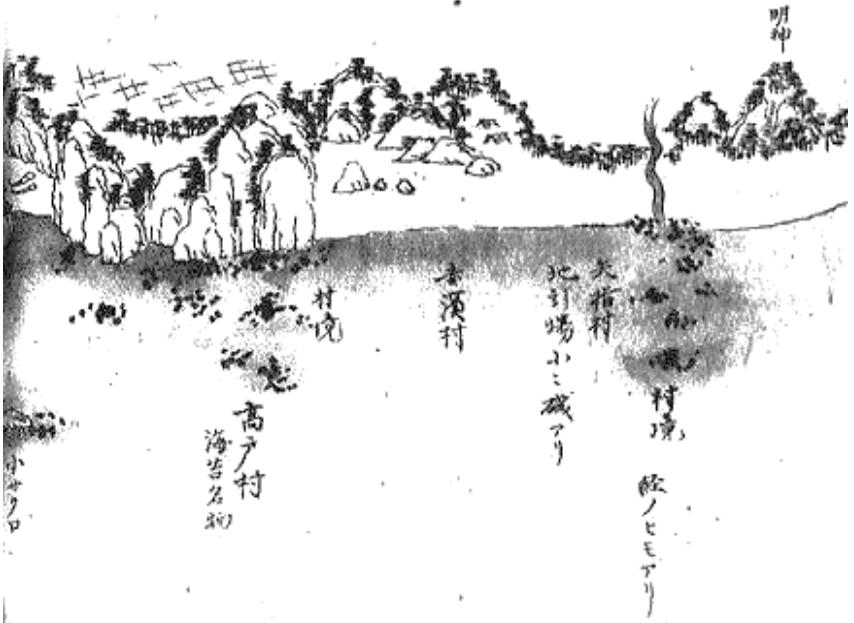






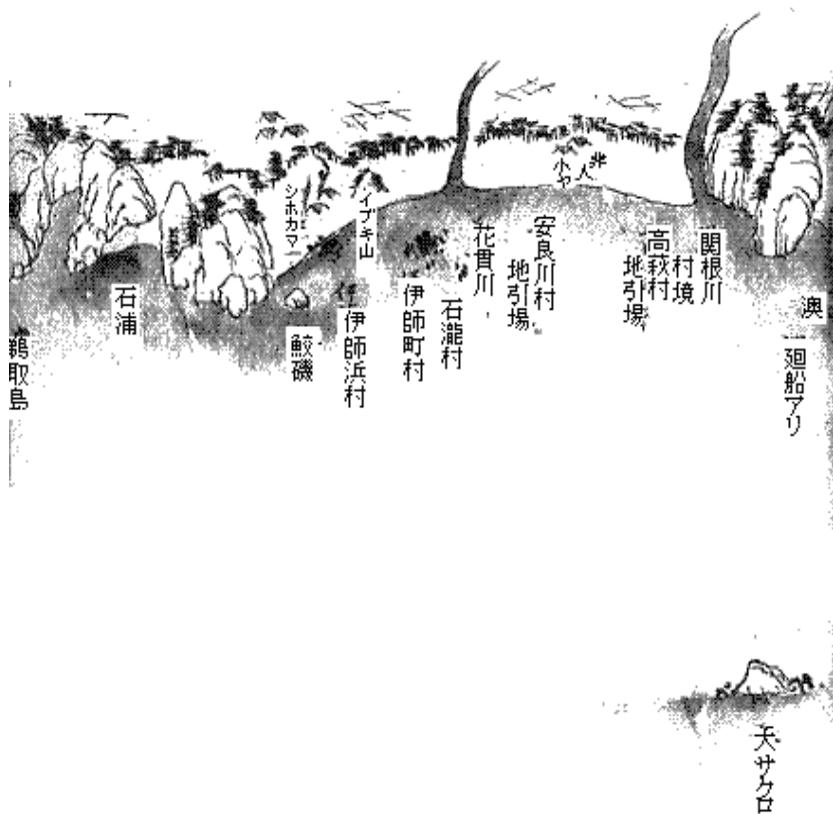


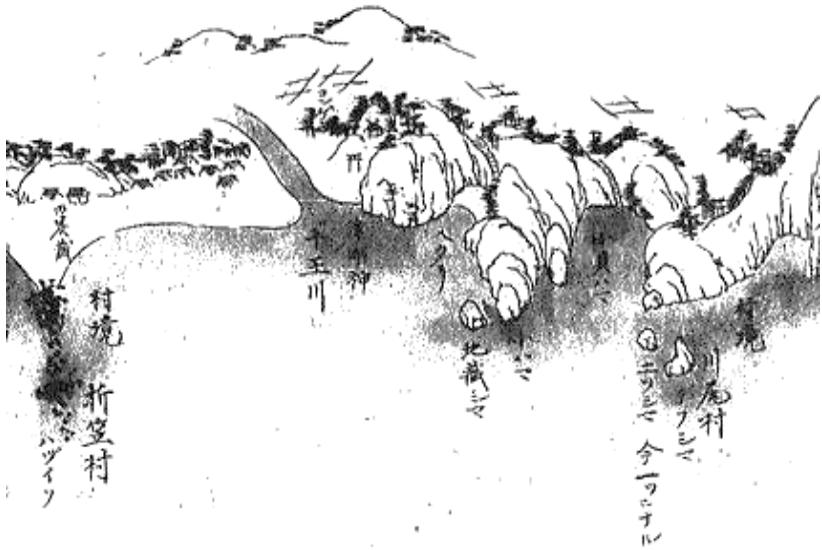


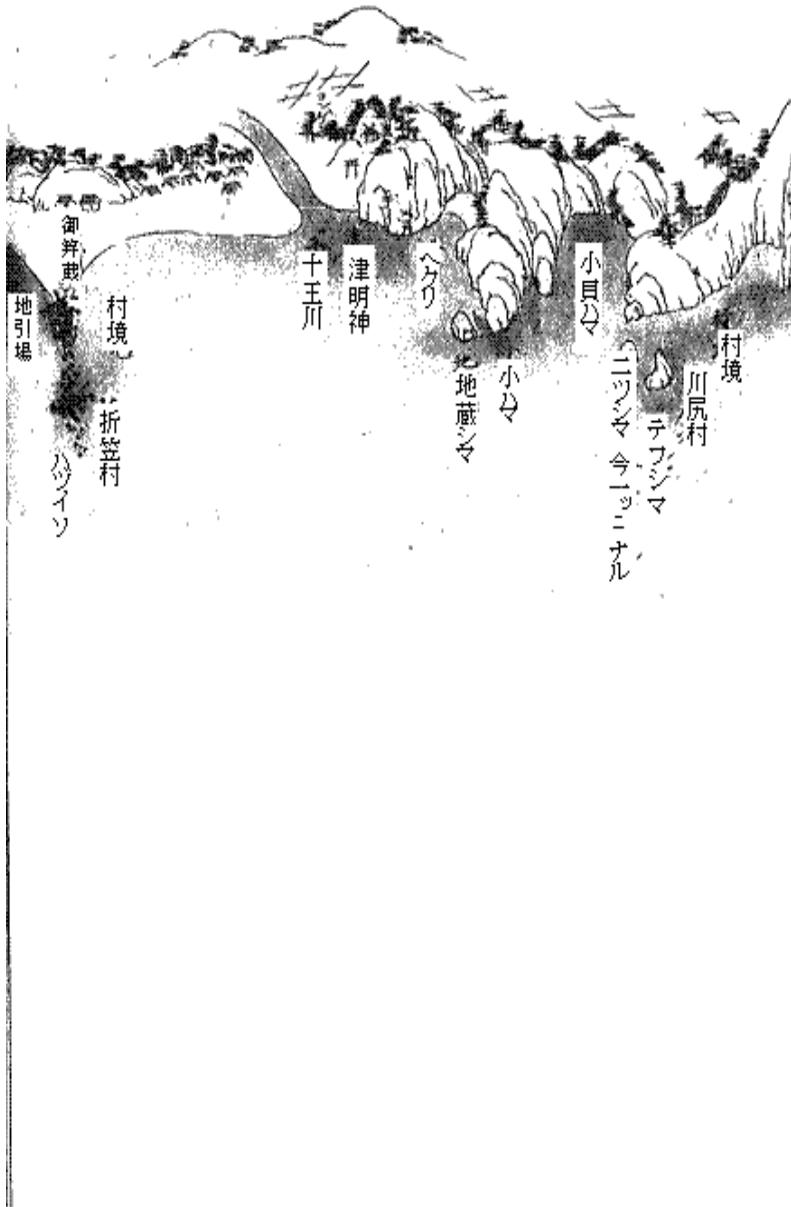


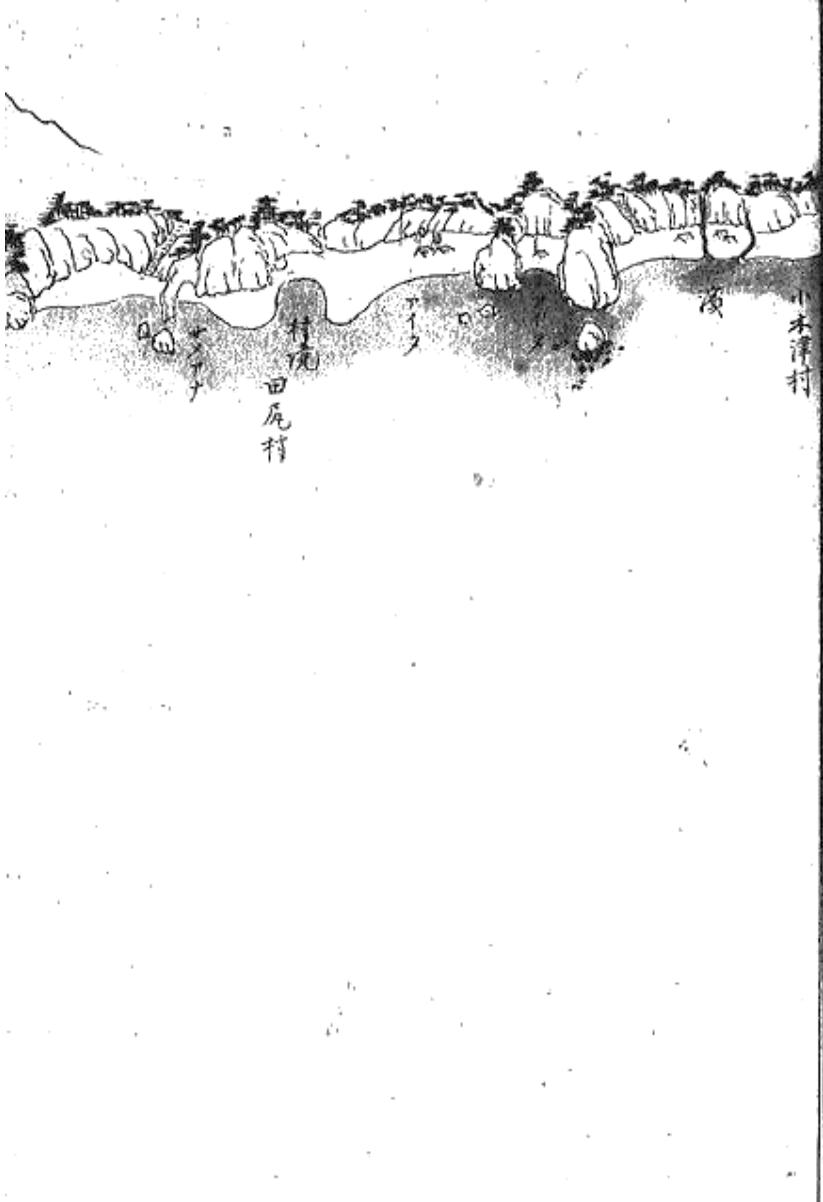






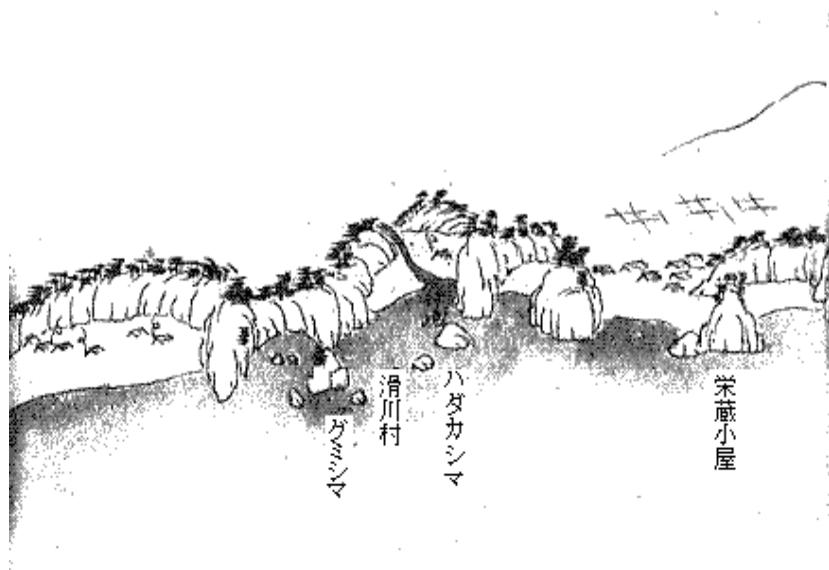










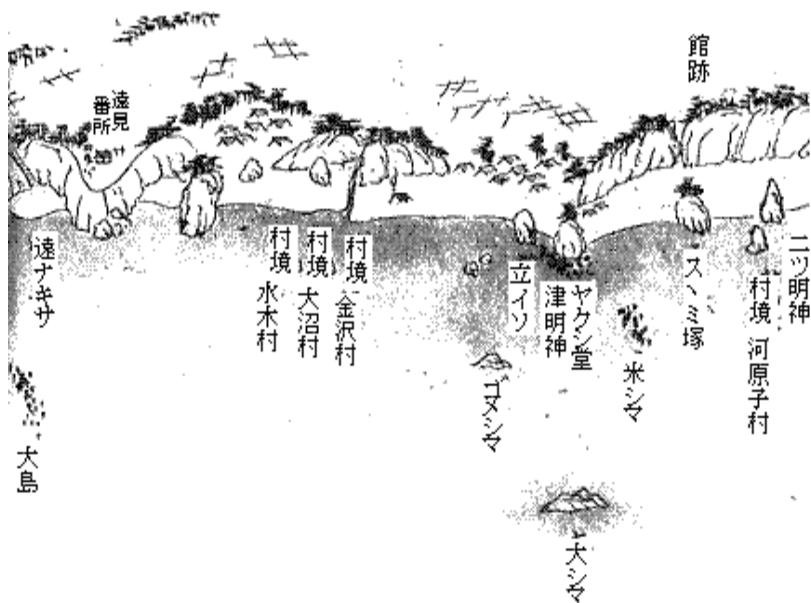






大磯  
トテゴ磯共云









大磯

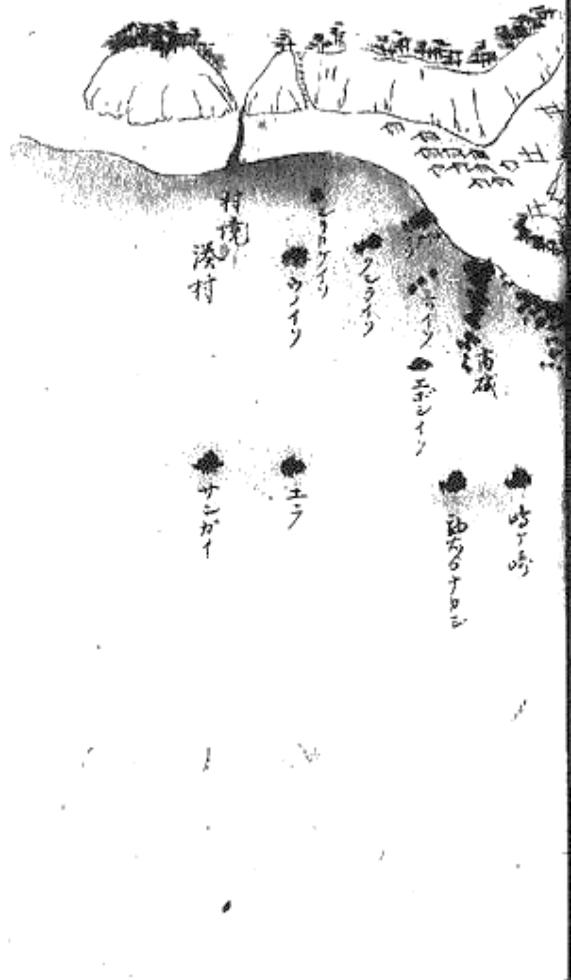
ウグウ

塩釜前より騎馬乗出し磯崎下乗付迄二里八町  
と云ふ多れとも吉里四町有之候



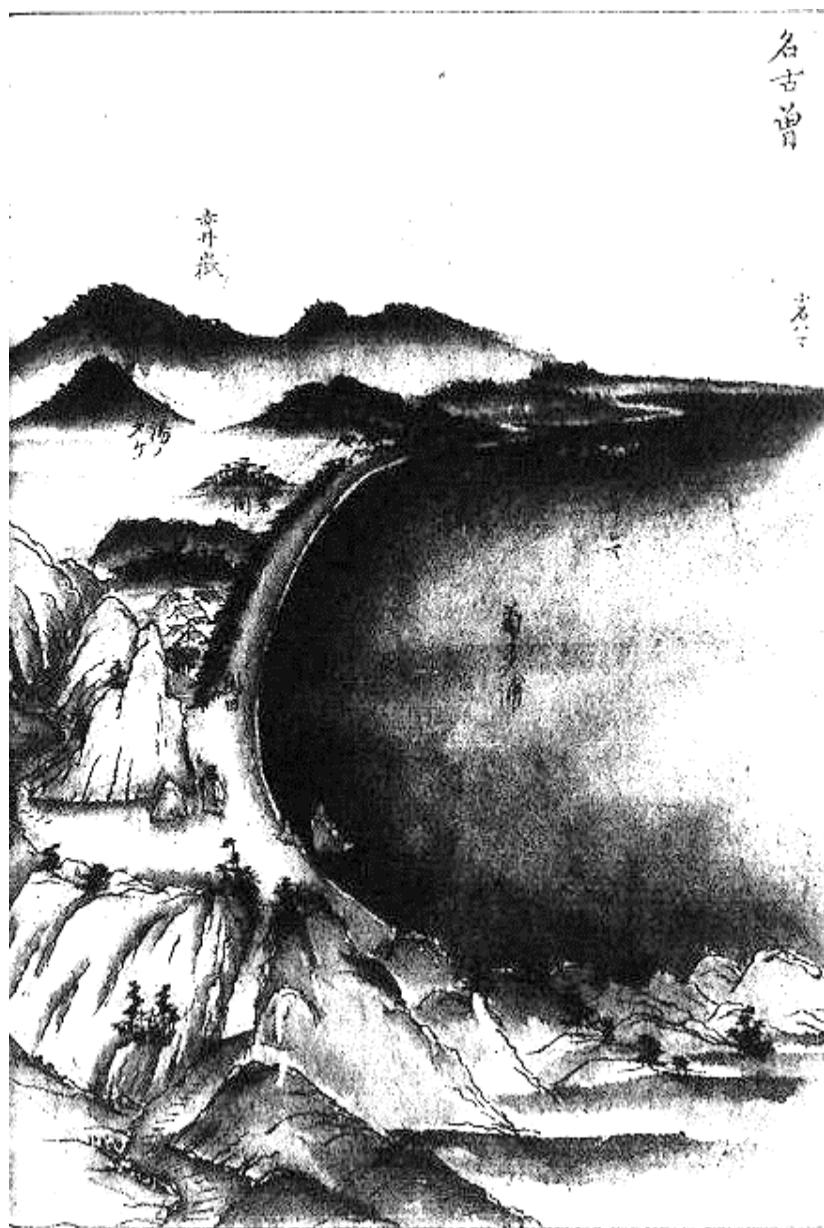


右ノ圖磁石等書記ス一キイナキ所ハチノメテ圖ス巨数ハ郡圖ニヨリテ  
見ルヘシ海岸ノ出淡川口ノ大小精細ナラス只大槪ヲ圖セルナリ磁石ノ  
右モ亦五人ノ云ナラハセルベニ記ス



右ノ図磯石等書記スヘキ事ナキ所ハチ、メテ図ス里数ハ郡図ニヨリテ  
見ルヘシ海岸ノ出没川口ノ大小精細ナラス只大概ヲ図セルナリ磯石ノ  
名モ亦土人ノ云ナラハセルマ、ニ記ス





名古曾

小名ハマ

赤井嶽

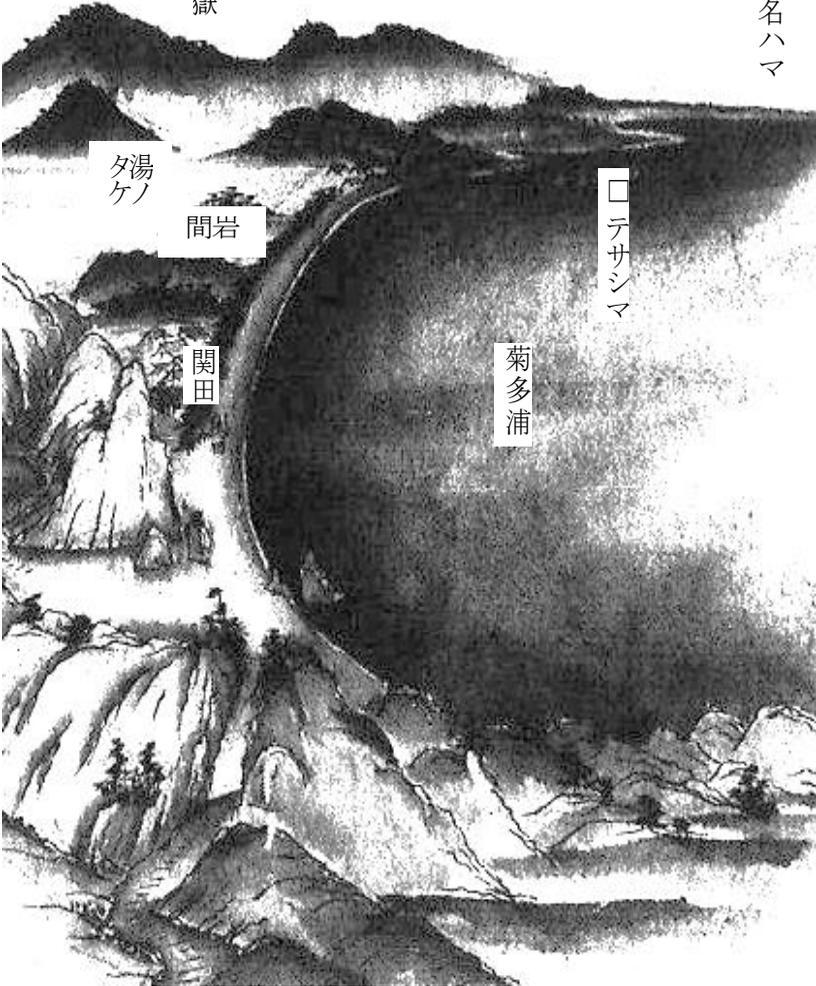
夕湯ケノ

間岩

□テサシマ

菊多浦

関田







大津村粉ヶ崎眺望

ミナト山

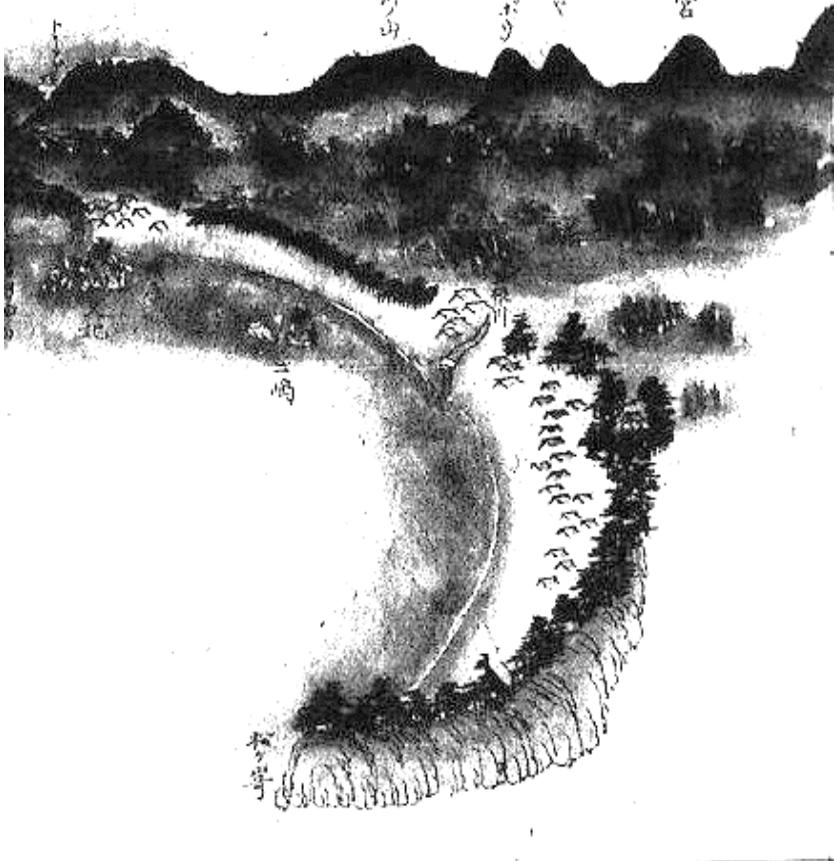
天狗宮

山十々

夕ヶ崎

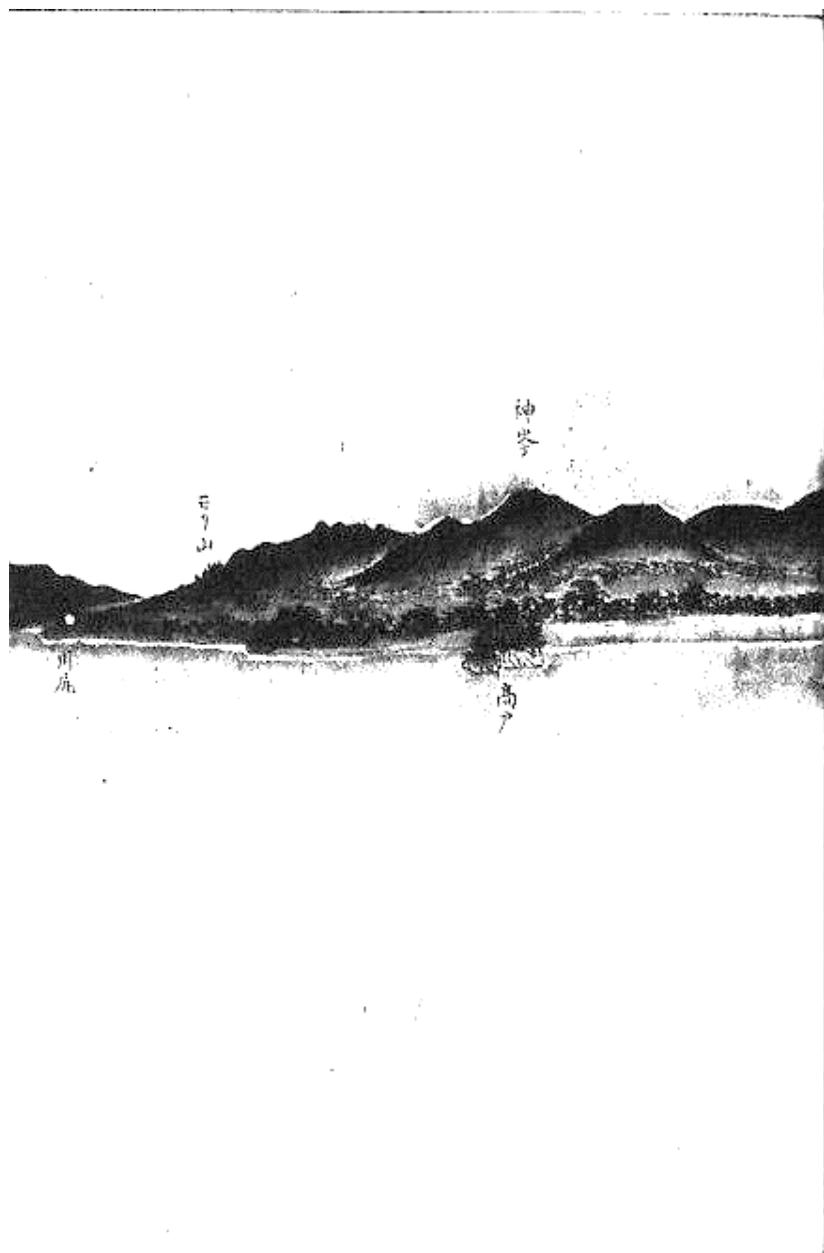
車御ノ山

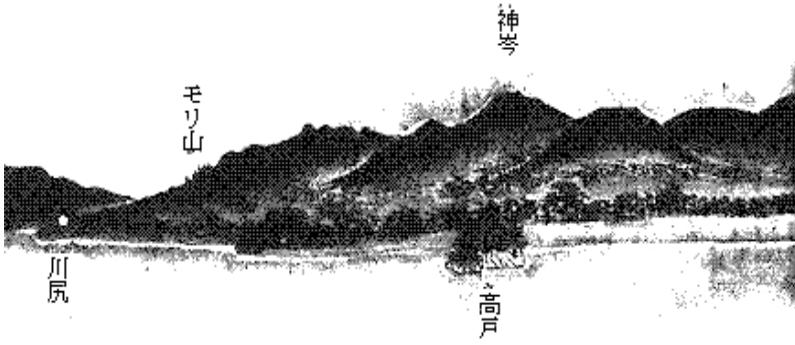
大塚



大津村松ヶ崎眺望  
ブツゴ山









※ 原本には、国立国会図書館の所蔵「みち艸集  
2巻（請求記号 124-245）」を用いた。

---

---

翻刻 みち艸集 卷之上

発行日 平成二十八年四月三十日

編者 茨城県立図書館

郷土資料整理ボランティアグループ

金沢多恵子、唐沢矩子、木村寿子、金原ヒロ  
辻 雅子、中山真一、堀江克己、山崎弘道  
柚原俊一、綿引文字（五十音順）

事務局 茨城県立図書館情報資料課 長山尚子

発行者 茨城県立図書館

T310-0011

茨城県水戸市三の丸一五三三八

---

---